
30th
Anniversary
医学生・研修医のための
放射線治療セミナー
公益社団法人 日本放射線腫瘍学会



序文

人と人を紡ぐ熱意

日本放射線腫瘍学会 理事長　宇野　隆

このたび、「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」が30周年という大きな節目を迎え、その歩みを記念誌として刻む運びとなりました。日本放射線腫瘍学会（JASTRO）を代表し、創成期から今日に至るまで本セミナーの開催と発展に献身的にご尽力いただいた歴代の先生方、チューター、企業関係者の皆様、そして情熱をもって参加された多くの医学生･研修医の皆様に、心より敬意と感謝を申し上げます。

本セミナーは、放射線治療の魅力を若い世代に直接伝える場として先人たちの並々ならぬ使命感と開拓者精神を力として始まりました。第1回セミナー以来、講義や実習にとどまらず、寝食を共にし、語り合い、将来を考える濃密な時間の中で、多くの出会いが生まれてきました。その中から放射線治療医を志す者が育ち、やがてチューターとして再びセミナーに戻り、後進を導くという循環が形成されました。これは単なる人材育成事業ではなく、学会の未来を担う人と人とのつながりを育ててきた、JASTROにとってかけがえのない財産です。

本記念誌に寄せられた文章に目を通せば、各時代の熱気とともに、セミナーに関わった方々の強い思いが鮮やかに目に浮かび心に伝わってきます。様々な困難を乗り越え前例のない企画を立ち上げる苦労、若手が主体的に関わる文化の醸成、大学や地域を越えた仲間意識の広がり、そして放射線治療の急速な発展とともに自らも変化しつつ次世代へ受け継ごうとする意思…。それらは、30年という時間を経てなお色褪せることなく、現在のJASTROの活動にも確実に継承されています。放射線治療は、これからのがん医療においてますます重要な役割を担います。一方で、その魅力と可能性を次世代に伝え、志ある若者を育て続けることは、学会に課せられた大切な使命です。本セミナーは、その使命を最も力強くかつ実践的に、そして温かく担ってきた活動です。

30周年は単なる到達点ではなく新たな出発点です。本記念誌に綴られた方々の言葉や記憶は、セミナーを彩った熱気と人間的なつながりの証であると同時に、これから放射線治療を志す若い世代への最良の贈り物となるはずです。信州の夏から始まった「人と人を紡ぐ熱意」が、放射線治療を志す若い世代にとってさらに多くの出会いと挑戦を生み出す契機となり、次の30年もこの学会を、そして日本のがん医療を豊かに照らし続けることを、心より願っています。

2026年8月



発刊にあたって

セミナーが繋げてきたもの、紡いでゆくもの

がん放射線治療推進委員会委員長　中村 聡明

日本放射線腫瘍学会（JASTRO）の活動の中で、最も「熱く」、真正面から人材育成に向き合ってきた場――それが「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」（以下、セミナー）です。30周年という大きな節目を迎え、多くの先輩方、仲間たちからの寄稿をいただきました。読み返すにつれ、そこには確かな人と人との「絆の物語」、そして「0から1」を生み出す泥臭い取り組みがあったことに、改めて気づかされます。ぜひこの記念誌は、歴史書ではなく、未来への指南書として読んでいただきたいです。

本記念誌の発刊にあたり、セミナーにまつわる三つの忘れ難き日の物語を記します。

1995年8月18日　放射線治療医宣言

信州の地で一人の放射線治療医が誕生しました。神戸大学6回生の彼は「夏の信州へ旅費・宿泊費無料で招待」という「（第1回）医学生のための放射線治療セミナー」の好条件につられてやって来たものの、信州大学で行われた高い熱量の講義・実習に圧倒され、舞台を美ヶ原高原に移した夜のBBQにて、高らかに「放射線治療医宣言」いたしました（なお参加25名中3名が放射線治療医になっています）。

しかし当時の裏事情は「診療科単位で医学生を対象とした宿泊型セミナーを行う試みは国内に前例がなく、資金調達や趣旨説明には多大な労苦」（小口正彦先生）があり、「亡くなられた伊津野格先生、谷義正氏、橋本省三教授のお三人の大きな力が有りましたことを重ねて伝え続けてゆきたく思います」（土器屋卓志先生）という「0から1」の大いなる産みの苦しみがありました。改めて、開催にご尽力いただいた先人のみなさまに感謝申し上げます。

2005年10月26日　セミナー卒業生が紡ぐ縦の糸・横の糸

シカゴ大学留学から8月に帰国し、初めて参加した国内学会、すなわち日本がん治療学会（名古屋）でのこと。（きっかけは思い出せませんが）互いに放射線治療医であることが分かり、自己紹介したところ、不



阿部光幸先生と橋本省三先生と



池田恢先生と木場律子さんたちと

意に「セミナーの第1回生でしたよね？」と問われ大変驚いたのを、今でも覚えています。聞いた主は、本誌編集長の板澤朋子先生。聞けば、第3回セミナー参加者の間でつながりが生まれ、歴代参加者の進路調査を進めているところで（そういえばシカゴ留学中にも調査メールが来ていた）、セミナー参加者の氏名はほぼ覚えていたとか。

このまま話は盛り上がり、JRS期間中の2006年4月7日、勝烈庵・馬車道総本店にて、のちのNExTにつながる「学生セミナーチューター会議」を行い、「奇跡のような3日間（吉村亮一先生）」であった第12回セミナー開催となりました。

その後の経過は、本誌に寄稿された先生方が記してくださっている通り。セミナー卒業生がチューターとして再びセミナーに参加する流れが生まれ、中堅若手放射線治療医の縦横のつながりが強固になり、JASTRO学術大会で「放射線治療のABC」（のちの教育講演基礎編）を始めたり、学会・セミナーで懇親会を開催したりと「他大学であっても仲間」という感覚が熟成されました。

2020年4月15日　パンデミックで見せた絆

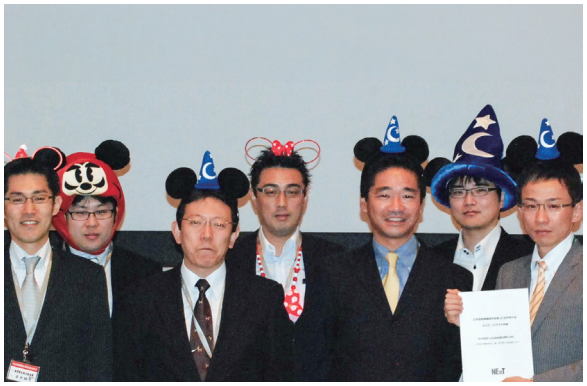
2020年の新型コロナウイルス感染症パンデミック。4月7日に最初の緊急事態宣言が出され、放射線治療の現場でも対応が求められましたが、がん医療全般においてコロナ対策情報は極めて少ない状況でした。このため4月15日、中堅若手有志でWebセミナー「放射線治療の現場より」を開催し、多くの反響をいただきました。翌日、JASTRO理事を中心とする「COVID-19対策アドホック委員会」および中堅・若手を中心とする「コロナ対策実行グループ」が組織され、定期Webセミナー開催（4月23日）、COVID-19特設サイト開設（4月27日）、JASTRO提言発出（5月12日）など次々と行いました。

未曾有のコロナ禍において、JASTROが他学会に先駆け「0から1」を生み出せたのは偶然ではありません。そこには、セミナーを通じて四半世紀にわたり培われてきた「絆」がありました。信州のBBQから始まった「人と人を紡ぐ熱意」（小口正彦先生）は、有事の際に組織を動かす強靭なネットワークへと進化していたのです。

紡いでゆくもの

JASTROは30年以上前から若手を大事にする学会であり、国内で前例のない「医学生セミナー」を開始しました。「今後、人材確保にとどまらず、次世代のリーダーを育成する場としての発展が期待」（阿部光幸先生）される中で、2025年、がん放射線治療推進委員会の中にU40小委員会が立ち上がり、2026年にはU40リーダーの和田優貴先生が若手代表としてJASTRO特任理事に選出されました。

この物語の次のページを紡ぐのは、今これを手にしている若き同志です！


放射線治療のABC＠2010年JASTRO学術大会


板澤朋子先生と開催した懇親会＠2017年JASTRO夏季セミナー

序文
人と人を紡ぐ熱意 …… 宇野　隆 1
日本放射線腫瘍学会 理事長

発刊にあたって
セミナーが繋げてきたもの、紡いでゆくもの …… 中村 聡明 2
がん放射線治療推進委員会委員長

特別寄稿
JASTRO学生セミナー30周年記念にあたって …… 阿部 光幸 6
京都大学名誉教授

より患者さんの為となる専門医の育成へ …… 山下　孝 8
元がん研有明病院副院長兼放射線治療部長

学生セミナー発足前夜 …… 土器屋 卓志 10
元埼玉医科大学国際医療センター放射線科教授

セミナー30年の歩み 12

第1回・第2回セミナーの熱き日々を振り返って …… 小口 正彦 16
がん研究会有明病院

第3回医学生のための放射線治療セミナーを開催して …… 三橋 紀夫 19
(株) 日立製作所 ひたちなか総合病院放射線治療科

「第4回医学生のための放射線治療セミナー in 新潟」の思い出 …… 松本 康男 20
新潟県立がんセンター新潟病院 放射線治療科部長

第5回医学生のための放射線治療セミナー 回想録 …… 中村 和正 21
浜松医科大学

第6回医学生のための夏季セミナーを振り返って …… 山田 章吾 22
東北大学名誉教授／杜の都産業保健会理事長

第7回セミナー主幹大学 札幌医科大学として …… 染谷 正則 23
札幌医科大学

第8回セミナー語り合おう、君とあなたの夢・未来 …… 井上 俊彦 24
大阪大学名誉教授

第9回セミナー開催の思い出 30周年に寄せて …… 早川 和重 25
北里大学名誉教授

想いをつないだ若手の挑戦、そして、“NExT”へ… 26
日本医科大学武蔵小杉病院　板澤 朋子
公益財団法人田附興風会 医学研究所北野病院　今葷倍 敏行

第10回医学生研修医セミナー …… 早渕 尚文 30
医療法人社団高邦会 高木病院／久留米大学名誉教授

第11回医学生・研修医のための放射線治療セミナーを担当させていただいて …… 長谷川 正俊 31
日高病院／奈良県立医科大学 放射線腫瘍医学講座

第12回医学生・研修医のための放射線治療セミナー回顧 …… 吉村 亮一 32
東京科学大学

第13回医学生・研修医のための放射線治療セミナー …… 大屋 夏生 34
熊本大学 放射線治療医学講座

第14回JASTRO医学生・研修医のための放射線治療セミナーについて …… 平岡 真寛 35
宇治徳洲会病院 放射線治療科

第15回医学生・研修医のための放射線治療セミナー 世話人として …… 仲澤 聖則 36
友愛記念病院／自治医科大学

放射線治療セミナーの思い出 …… 石原 俊一 37
名古屋大学 医学部附属病院

NExTの歩みを振り返る——NExT代表経験者より 38
新潟県厚生連 長岡中央綜合病院 阿部 英輔
武蔵野赤十字病院 戸田 一真
京都府立医科大学附属病院 相部 則博

医学生・研修医のための放射線治療セミナー参加者のキャリアパス・発表スライド集 40

JASTRO医学生・研修医のための放射線治療セミナーの今後への期待 …… 若月 優 42
量子科学技術研究開発機構 QST病院

‘良縁’に恵まれまして …… 金本 彩恵 43
新潟市民病院

JASTRO医学生・研修医セミナー30周年に寄せて …… 中嶋 綾 44
公益財団法人田附興風会 医学研究所北野病院

第10回セミナー（2004年）@久留米に参加して …… 有賀 拓郎 45
中頭病院

JASTRO医学生研修医セミナー30周年記念誌 …… 高橋 重雄 46
香川大学 医学部附属病院

JASTRO医学生研修医セミナー30周年によせて …… 青木 友希 47
旭川医科大学

セミナー30周年に寄せて——参加者から運営へ、私の10年 …… 岸 徳子 48
京都大学 医学部附属病院

全国・未来・熱意につながるJASTRO医学生・研修医セミナー …… 村本 耀一 49
順天堂大学

医学生セミナー「後援企業の立場から」 …… 木場 律子 50
株式会社バリアン メディカル システムズ ガバメント・アフェアーズ部

教育の場に立ち会って感じた放射線治療の魅力と可能性 …… 佐藤 礼 51
エレクタ株式会社 リニアック＆ソフトウェアソリューションズ部

後援企業の立場から …… 中島 尚紀 52
株式会社日立ハイテク ヘルスケア事業統括本部 治療システム事業部 営業本部 治療マーケティング部

あとがき
将来に向けて …… 和田 優貴 53
医学生・研修医のための放射線治療セミナー小委員会委員長／秋田大学 医学部附属病院

ご所属・ご職責については執筆者ご本人のお申出のまま記載しております。



特別寄稿

JASTRO学生セミナー 30周年記念にあたって

京都大学名誉教授　阿部 光幸

日本における放射線医学の発展は、1970年代以降のCTやMRIといった画像診断技術の革新により大きく進展した。一方で、放射線治療は長らく外科治療の補助的手段として位置づけられ、診断分野に比べて相対的に低迷していた。多くの放射線科医が診断領域に関心を向ける中で、放射線治療に専従する医師は少なく、大学病院においても診断と治療を兼務する体制が一般的であった。このような状況は、放射線治療の専門性の確立や発展を阻害し、日本の放射線治療が国際的に遅れをとるのではないかという危機感を生み出した。

こうした背景のもと、放射線治療を独立した学問領域として発展させる必要性が認識され、1988年に日本放射線腫瘍学会（JASTRO）が設立された。JASTROの設立は、放射線治療の専門性確立と人材育成、臨床・研究の発展を目的とした重要な転機であった。しかしながら、学会設立後も放射線治療医の不足は深刻であり、患者数の増加や治療技術の高度化に対して人材供給が追いつかない状況が続いた。実際、放射線治療医数は1990年の452名から2005年には958名へと増加したものの、同期間における新規患者数は約6.3万人から16.2万人へと約2.6倍に増加しており、需要と供給の乖離はむしろ拡大していた。さらに2015年には患者数が約36万人に達し、約1,800名の放射線治療医が必要とされると予測されるなど、人材不足は構造的課題であった。

この背景には、大学における教育体制の不備が大きく関与している。2007年時点で全国80大学のうち放射線腫瘍学講座を有する大学は13校（16％）にとどまり、専任教授を有する施設も31校（38.8％）に過ぎなかった。このような状況では体系的な教育が十分に行われず、医学生が放射線治療に触れる機会は限られていた。その結果、進路選択において放射線治療が十分に認識されず、志望者が増えにくいという悪循環が生じていた。すなわち、放射線治療医不足の本質は単なる人員不足ではなく、教育とリクルートの仕組みの欠如にあったといえる。

この課題を解決するため、医学生の段階から放射線治療の意義や魅力を伝える取り組みの必要性が認識され、1994年に有志による検討が行われた。その結果、全国の医学生に直接アプローチする新たな教育プログラムとして、放射線治療セミナーの開催が企画され、1995年8月に「第1回医学生のための放射線治療セミナー」が信州大学の主管の元、松本市で開催された。初回の参加者は25名であったが、講義と実習を組み合わせた実践的な内容により、放射線治療の魅力を体験的に理解させる教育的意義は大きかった。この活動は翌年JASTRO理事会で正式に学会事業として承認され、継続的な取り組みとして発展することとなった。

その後、セミナーは「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」として発展し、参加者数の増加とともに教育内容も充実していった。特に2006年には、過去の参加者で放射線治療医となった若手医師が指導にあたるチューター制度が導入され、より双方向的かつ実践的な教育体制が整備された。この制度により、参加者は治療計画の作成など臨床に即した内容を学ぶことが可能となり、教育効果は一層



講演中の様子

高まった。

さらに、このセミナーの有効性は具体的なデータによって裏付けられている。222名の参加者を対象とした追跡調査では、26名（15.7％）が放射線治療医となり、5名（3.0％）が診断・治療兼任医となっていた。また、1995年から2017年までの23年間における累計参加者は805名に達し、そのうち30％以上がJASTROに入会している。これらの結果は、本セミナーが単なる教育の場にとどまらず、放射線治療医のリクルートにおいて重要な役割を果たしていることを示している。一方で、放射線治療を取り巻く環境は現在も変化し続けている。治療技術の進歩によりその有効性は広く認知され、患者数の増加は今後も続くと予想されるが、それに対応する人材の確保は依然として大きな課題である。この問題の解決には、大学における放射線腫瘍学講座の整備と教育体制の強化に加え、医学生への早期教育と継続的なリクルート活動が不可欠である。

以上のように、JASTRO医学生・研修医セミナーは、放射線治療医不足という構造的課題に対する具体的対策として誕生し、実際に人材育成に寄与してきた。今後はセミナーの開催機会の拡充や教育内容のさらなる充実を図ることで、より多くの医学生に放射線治療の魅力を伝え、次世代の放射線治療医を育成していくことが求められる。このような継続的取り組みが、日本における放射線治療の発展と質の向上を支える基盤となるであろう。その歩みの陰には、本事業の意義を理解し支え続けてきた関係者の尽力があったことを付記しておきたい。

近年、放射線治療は高精度化・個別化が進み、粒子線治療や画像誘導放射線治療、さらに免疫療法との併用など、新たな展開を迎えている。これに伴い、放射線治療医には従来にも増して高度な専門性と学際的視点が求められている。このような時代において、医学生・若手医師の段階から放射線腫瘍学に触れ、その本質を理解する機会の重要性は一層高まっている。JASTRO医学生・研修医セミナーは、今後、人材確保にとどまらず、次世代のリーダーを育成する場としての発展が期待される。教育内容の高度化や国際的視点の導入、多職種連携の強化を通じて、その役割はさらに拡張していくであろう。30年の歩みの上に立ち、次の時代を見据えた継続的発展に期待したい。



懇親会にて参加者と歓談



懇親会にて　左より井上俊彦先生、私、伊津野格先生



特別寄稿

より患者さんの為となる専門医の育成へ

元がん研有明病院副院長兼放射線治療部長　山下　孝

はじめに

医学生セミナーの開始からはや30年、感慨深いものがあります。セミナーを続けてきた皆様に感謝します。私はもう現在81歳ですから、私が51歳の頃に、わが国の放射線治療専門医が少なくて、放射線治療専門医をどうやって増やして、放射線治療を発展させるかを、放射線治療医、放射線治療業界の人や、医学物理士等と相談しながら医学生セミナーを始めたのを思い出します。下の写真は、セミナー開始前の1987年に工業会と学会が、ASTROへ視察団を派遣した時のものです。この派遣団を通じて、放射線治療に関与する人材の必要性を認識し始めました。その隣の写真は、1992年10月のハイパーサーミア学会で、医学生セミナーでもお世話になったユーロメディテックの谷義正社長、大西美春氏と撮ったものです。

この30年間で、放射線治療専門医はずいぶん増加したと思います。しかし、ここでもう一度、がん治療における放射線治療の役割を問い直し、これから30年後のがん治療の状態を考えて、放射線治療医の養成計画の再考が必要な時期に来ているのではないでしょうか。医学生セミナーは今後、どう発展させるべきかを問い直す時期に来ているのかもしれません。

医学部で放射線治療が十分教育されていない可能性

医学部に放射線腫瘍学教室のない大学が、東京大学を含めてまだいくつか残っていますが、多くの大学で、放射線腫瘍学教室として独立する傾向にあります。学問の進歩とともに、どの診療科も研究専門分野は細分化され、一人の教授が全てを見ることが難しくなっているからでしょう。また、講座になっていないと、どうしても教育が十分でなくなることは否めないでしょう。その場合、放射線治療医が育ちにくくなっていくのは仕方のないことです。一日も早く、全ての医学部に放射線腫瘍学教室が出来ることを望んでやみません。なぜなら、がん患者さんにがん治療の有力な治療法である放射線治療をより



1987年　ASTROへの視察団



1992年　ハイパーサーミア学会で



2010年　広島で行われたセミナー

適切に提供できるからです。

がん患者数の減少と放射線治療患者数の減少

私が、23年前、2003年にJASTROの会長の時に、芦野靖夫（CMS）さんの協力を得て、全国の放射線治療患者数の予測を立てました。その予想は、途中までは当たっていたのですが、最近は思ったほど放射線治療患者数が増えていないようです。国民の高齢化と共にがん患者数は増えているわけですから、がん患者さんが思ったほど放射線治療を受けていないのでしょう。外科的治療も侵襲の少ない、患者さんの負担が少ない治療法が出てきましたし、薬剤による治療も効果のある薬剤が出てきているので、放射線治療が役立つ分野が減少していることもあるのでしょう。今後も、患者さんの為になる、チーム医療を進める中で、放射線治療の役割を果たすべく放射線治療医の育成に努力する必要があります。

医学生研修医セミナーの将来

これまでのセミナーの実績を、業績として、論文化して、世に問うことも必要かもしれません。そして、JASTROとしても、担当理事が中心になって、公的な研究費を取得してあるべき姿を追い続けることが必要でしょう。放射腫瘍学の医学部における授業時間数、医師、技師、看護師の国家試験に放射線腫瘍学の問題をもっと出題すれば、医学生の勉強意欲を高めることにつながることが考えられます。そして、がん治療に携わる臨床各科の先生の放射線腫瘍学への理解がより深まるでしょう。上の写真は2010年に広島で行われたセミナーでの全員集合写真です。

セミナーへの提案

JASTRO医学生研修医セミナーに参加した方々に対して、セミナー後も、放射線腫瘍学の進歩を伝えるメイルを提供し続けて、理解を深めてもらうのはそれほど費用を掛けなくても可能なことではないかと考えます。また、セミナーに参加してくれた方々の中で、研修が終わって、例え、放射線腫瘍医にならなくても、放射線腫瘍学のよき理解者であり続けていただく事を期待できます。

そして、セミナーに出席できない医学生、研修医にも放射腫瘍学の情報を伝達する方法として、例えば、インターネットなど電子媒体を使った広報活動を行うことが重要かと思われます。JASTRO広報部との共同作業とか、必要なら、関連業界の方々や放射線治療が奏功した患者さんに協力お願いすることも考えられます。関係している皆様のご努力を期待しています。



特別寄稿

学生セミナー発足前夜

元埼玉医科大学国際医療センター 放射線腫瘍科教授　土器屋 卓志

ことのはじめは1994年のJASTRO理事会にASTRO会長を迎えてのことである。

質問「米国で多くの放射線治療医がいるのはなぜでしょうか？」

答「我が国では早くから学生時代にリクルートをかけたのです」

土器屋は思った「そのアイデア　いただきだな」

というわけで健保委員長であった私は当時、有志を募って各地のレジャー施設で、食いながら、飲みながら、露天風呂につかりながら、放射線治療の将来を語りあう一泊二日の合宿の健保委員会を定期的に開いておりました（もちろん手弁当です）。

山中湖畔での合宿でASTRO会長から得たアイデアの紹介に反応したのが、（故）伊津野格先生である。

「日本の真ん中の信州に学生を集めてセミナーを開催しましょう」

土器屋は思った「いただき‼」

早速次回の理事会に学生セミナーを諮ったが、反応は冷たいものでした。理事の多数は大学教授でしたので

「学生の教育に第三者が介入するのはよろしくない」

つまり当時の社会状況では文科省の大学への過大な介入が問題となり、大学の「研究･教育の自主･独立」が大きな課題であったのです。

某教授「学生の教育は我々が担っているのだ。我々にまかせなさい」

土器屋「教授の皆さんがしっかり教育していないから放射線治療を目指す学生が皆無なのでしょう！」（当時一介の国立病院の医長が蒼々たる教授連によく言ったものです）

多勢に無勢で学生セミナーの提案は廃案になろうとしておりました。

そこで現れたのが遅れて参加された阿部光幸教授の天の一言です。

「学生セミナー開催は放射線治療の将来に極めて大事なことです。やりましょう‼」

一挙に形勢が変わったけれど、妥協案で「学生セミナー」は　JASTROの外に作ることで決着。余談ながら新入医局員（現在の研修医に相当）も含めたいと思いましたが、教授連の強硬な拒否反応でこれは却下。

そこで　JASTROの外に学生セミナー委員会を創設して（故）橋本省三教授（慶應大）に委員長をお願いしました。橋本省三教授は私の恩師ですが、不思議と存在感のある方で、人脈がやたら豊富でした。ことが揉めると「足して2で割ればちょうど良いのだ」と言うのが口癖でしたが、しかもそれで上手くゆくことがとても多かったです。学生セミナー開催に難題が起こると橋本教授の名前を引き合いに出すとすんなり解決したものです。

さてセミナーの開催は伊津野格先生の信州大学で引き受けていただくこととなりました。しかしもっ



小淵沢ロッジにて
後列左より　小口正彦、伊津野格　一人おいて大西 洋、大西美春
前列左より　谷 義正、芦野靖夫、橋本省三、土器屋卓志（敬称略）

とも難題であったのがお金です。学会の主催でなく、いわば有志の主催ですので、寄付金の要望が困難でした。

土器屋「金が無い、どうしよう、どうしよう」

そこでも天の助けです。（故）谷義正氏（ユーロメディテック社）の

「先生　お金は私どもでなんとかしますよ」

土器屋は思った「放射線治療の普及には産学協同が絶対に必要だなー」

というわけで　信州大学放射線科医局の皆さんの奮闘、一部の企業の方々の寄付金で第一回学生セミナーが開催に至りました。

第一回のセミナーが好評で、セミナーはJASTROが主催することとなり、その後に続いていきました。詳細は、この記念誌で他の方々が詳しく述べられますが、 亡くなられた伊津野格先生、谷義正氏、橋本省三教授のお三人の大きな力が有りましたことを重ねて伝え続けてゆきたく思います。

放射線治療の普及のために、JASTRO会員・企業の皆様は今でも熱意を持ってアイデアをお持ちでしょうが、それが何らかの形を持って具現化するための嚆矢の参考になれば幸甚です。

閑話休題

1. セミナー参加の学生さん方に旅費を渡すとき

「私は往復　グリーン席です」

えぇ！　学生がグリーン席だって！

2. 某学生さん

「両親は新興宗教の会かもしれないからと心配していましたが、そうではなかったので安心しました」

3. 美ヶ原への遊覧貸し切りバスの後ろを乗用車で追いかけながら伊津野格先生が運転席で小声で

「土器屋先生、バス旅行の保険をかけるお金の余裕がなかったんだよね。事故ったらどうしよう」

土器屋「事故が無いことを祈るよりないですね」

幸い事故もなく参加学生さん達を無事に松本駅で送ったあとの伊豆野先生の笑顔が浮かんできます。

以上

セミナー30年の歩み

1995 平成7

第1回セミナー
開催日：8月18日～19日
主催：放射線治療セミナー委員会
委員長：橋本 省三
世話人：伊津野 格
事務局：信州大学
開催地：信州大学医学部付属病院・
美ヶ原高原三城牧場
コテッジカオス
後援：JASTRO教育委員会
財源：学術振興基金

医学部6年生を対象とした「医学生のための放射線治療セミナー」開始。

1996 平成8

第2回セミナー
開催日：8月2～3日
主催：放射線治療セミナー委員会
委員長：橋本 省三
世話人：伊津野 格
事務局：信州大学
開催地：信州大学医学部付属病院・
美ヶ原高原三城牧場
コテッジカオス
後援：JASTRO教育委員会
財源：学術振興基金

1997 平成9

第3回セミナー
開催日：8月1日～4日
主催：放射線治療セミナー委員会
委員長：橋本 省三
世話人：新部 英男
事務局：群馬大学
開催地：群馬大学医学部刀城会館・
わたらせ渓谷サンレイク
草木
後援：JASTRO教育委員会
財源：学術振興基金

1998 平成10

第4回セミナー
開催日：7月30日～8月2日
主催：放射線治療セミナー委員会
委員長：橋本 省三
世話人：酒井 邦夫
事務局：新潟大学
開催地：新潟大学医学部有壬記念館・
グリーンピア津南
後援：JASTRO教育委員会
財源：学術振興基金

2003 平成15

第9回セミナー
開催日：8月1日～3日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：晴山 雅人
世話人：早川 和重
事務局：北里大学
開催地：湘南国際村センター
財源：学術振興基金

セミナー参加者が激減し、JASTRO内で”セミナー開催打ち切り論”が上がる。
【セミナー追跡調査研究班】による第3回セミナー参加者の進路追跡調査開始。

2004 平成16

第10回セミナー
開催日：8月6日～8日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：晴山 雅人
世話人：早渕 尚文
事務局：久留米大学
開催地：久留米大学医学部・
築水会館
財源：学術振興基金

新医師臨床研修制度導入。セミナー参加対象が初期研修医までに拡大され「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」へ変更。
【セミナー追跡調査研究班】によるセミナーサポート開始。
旧JASTRO誌への第3回セミナー参加者の進路追跡調査報告を発表②。
平成16･17年度JASTRO研究調査“卒前におけるセミナー形式専門的教育がキャリアパスの与える影響の検討；参加者の視点で見たJASTRO学生セミナー”が採択。

2005 平成17

第11回セミナー
開催日：8月5日～7日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：早川 和重
世話人：大石 元
事務局：奈良県立医科大学
開催地：奈良県社会福祉総合
センター
財源：学術振興基金

JASTRO内に「放射線腫瘍医増加のためのAd hoc委員会」設立。教育委員会内にセミナー準備・支援委員会の設置へ。
キャリアパス報告（JRS大会, JASTRO第18回大会）

2006 平成18

第12回セミナー
開催日：8月4日～6日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：早川 和重
世話人：渋谷 均
事務局：東京医科歯科大学
開催地：熱海後楽園ホテル・
静岡がんセンター（見学）
財源：学術振興基金・教育基金

【セミナー追跡調査研究班】を基にし、次世代放射線治療医育成のための企画集団【NExT】発足。教育委員会下で若手医師によるセミナー運営補佐・チューター制度開始。
第1～8回セミナー参加者進路追跡調査報告③

参考文献

①山田章吾，晴山雅
第5回及び第6回医学生のための放射線治療セミナー参加学生の追跡調査報告
JASTRO NEWSLETTER 2002, No.2 Vol.62

②今葷倍敏行，内野三菜子，板澤朋子，染谷正則，尾藤誠司
「第3回医学生のための放射線治療セミナー」参加者進路追跡調査
－参加後7年を経過して－
J Jpn Soc Ther Radiol Oncol, Vol.16（4）：225-229, 2004

③板澤朋子，内野三菜子，今葷倍敏行，染谷正則，尾藤誠司
第1回～第8回「医学生のための放射線治療セミナー」参加者進路追跡調査
J Jpn Soc Ther Radiol Oncol, Vol.17（4）：215-219, 2006

④板澤朋子，内野三菜子，今葷倍敏行，染谷正則，尾藤誠司
JASTRO平成16･17年度研究調査報告　卒前におけるセミナー形式専門的教育がキャリアパスに与える影響の検討；参加者の視点でみたJASTRO学生セミナー

1999 平成11

第5回セミナー
開催日：7月30日～8月1日
主催：放射線治療セミナー委員会
委員長：橋本 省三
世話人：増田 康治
事務局：九州大学
開催地：九州大学同窓会館・湯布院ハイツ
後援：JASTRO教育委員会
財源：学術振興基金

2000 平成12

第6回セミナー
開催日：8月3日～6日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：山田 章吾
世話人：山田 章吾
事務局：東北大学
開催地：宮城蔵王青根温泉エコーホテル・東北大学（見学）
財源：学術振興基金

セミナーはJASTRO教育委員会の事業へ。この年はセミナー参加希望が120名を超え、参加者は6年生のみ約60名に絞られた。

2001 平成13

第7回セミナー
開催日：8月3日～5日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：山田 章吾
世話人：晴山 雅人
事務局：札幌医科大学
開催地：タケダ札幌ビル・定山渓温泉
財源：学術振興基金

この年より、セミナーは医師向け夏季セミナーと並行開催へ。
懇親会は合同開催であった。

2002 平成14

第8回セミナー
開催日：8月1日～4日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：山田 章吾
世話人：井上 俊彦
事務局：大阪大学
開催地：大阪大学大学院・大阪大学医学部付属病院・関西地区大学セミナーハウス
財源：学術振興基金

セミナーにてRTPを用いた治療計画実習が初めて取り入れられた。
山田らによる第5・6回セミナー参加者の追跡調査報告①

2007 平成19

第13回セミナー
開催日：8月3日～5日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：早川 和重
世話人：大屋 夏生
事務局：熊本大学
開催地：熊本県医師会館・熊本大学病院（見学）
後援：NPO放射線治療支援センター
財源：教育基金

平成16・17年度JASTRO研究調査報告発表④、キャリアパス報告（JASTRO第20回大会）。
レジナビフェアブース出展開始。
JASTRO内に「夏期セミナー・医学生研修医のあり方検討小委員会」設置。NExTの活動は高評価を得、代表が教育委員会委員となる。

2008 平成20

第14回セミナー
開催日：8月1日～3日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：根本 建二
世話人：平岡 眞寛
事務局：京都大学
開催地：滋賀県立県民交流センター「ピアザ淡海」・京都大学医学部附属病院（見学）
財源：教育基金

理事会内で、医学生・研修医のリクルートを目的とした委員会設置が決まる。
キャリアパス報告（JASTRO第21回大会）

2009 平成21

第15回セミナー
開催日：7月31日～8月1日
主催：JASTRO教育委員会
委員長：根本 建二
世話人：仲澤 聖則
事務局：自治医科大学
開催地：TFTホール・癌研有明病院（見学）
財源：教育基金

教育委員会内に「医学生・研修医セミナー実行小委員会」設立。Ad hoc委員会は、常設の「がん放射線治療推進委員会」に改編。
第1～13回セミナー参加者進路追跡調査報告⑤

⑤板澤朋子
第1回～第13回「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」参加者のキャリアパス
JASTRO NEWSLETTER 2009, NO.4 Vol.94

⑥阿部光幸
日本放射線腫瘍学会創立25周年―発展の歩みと明日への期待
日本放射線腫瘍学会25周年記念誌：4-5, 2012

⑦Yukihisa Tamaki, Tomoko Itazawa, Tomoyuki Okabe, Kazuma Toda, Eisuke Abe, Satoaki Nakamura, Taisuke Inomata
Long-term results of radiation oncology seminar for medical students and residents held between 1995 and 2011: career paths of the participants.
Jpn J Radiol（31）: 755-759, 2013

2010 平成22

第16回セミナー
開催日：7月3日
推進委員会委員長：西村 恭昌
小委員会委員長：西村 恭昌
総括責任者：内田 伸恵
実行責任者：岡部 智行
開催地：大阪府立成人病センター
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

セミナーの世話人制度廃止。同時に医師向け夏季セミナーと会場・運営が分離。
セミナーは「JASTROがん放射線治療推進委員会」内の「セミナー・レジナビ実行小委員会」による開催へ。

第17回セミナー
開催日：7月17日
推進委員会委員長：西村 恭昌
小委員会委員長：西村 恭昌
総括責任者：唐澤 克之
実行責任者：玉置 幸久
開催地：エレクタ東京本社トレーニングセンター
後援：エレクタ株式会社

NExTを中心とした若手医師による学生・研修医向けの初教育講演「放射線治療のABC」
キャリアパス報告（JASTRO第23回大会）

2011 平成23

第18回セミナー
開催日：7月2日
推進委員会委員長：西村 恭昌
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：内田 伸恵
実行責任者：岡部 智行
開催地：KKRホテル大阪
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

第19回セミナー
開催日：7月16日
推進委員会委員長：西村 恭昌
小委員会委員長：西村 恭昌
総括責任者：仲澤 聖則
実行責任者：神沼 拓也
開催地：エレクタ東京本社
後援：エレクタ株式会社

2014 平成26

第24回セミナー
開催日：7月5日
推進委員会委員長：笹井 啓資
小委員会委員長：内田 伸恵
総括責任者：内田 伸恵
実行責任者：相部 則博
開催地：KKRホテル大阪
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

第25回セミナー
開催日：7月19日
推進委員会委員長：笹井 啓資
小委員会委員長：内田 伸恵
総括責任者：中山 優子
実行責任者：金澤 亜希
開催地：エレクタ東京本社
後援：エレクタ株式会社

2015 平成27

第26回セミナー
開催日：7月4日
推進委員会委員長：永田 靖
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：石原 俊一
実行責任者：相部 則博
開催地：KKRホテル大阪
後援：エレクタ株式会社

第27回セミナー
開催日：7月18日
推進委員会委員長：永田 靖
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：若月 優
実行責任者：吉田 匡宏
開催地：株式会社バリアンメディカルシステムズ
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

キャリアパス報告
（JASTRO第28回大会）

2018 平成30

第32回セミナー
開催日：7月7日
推進委員会委員長：永田 靖
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：澁谷 景子
実行責任者：青木 友希
開催地：KKRホテル大阪
後援：株式会社日立製作所

第33回セミナー
開催日：7月14日
推進委員会委員長：永田 靖
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：村上 祐司
実行責任者：青木 秀梨
開催地：エレクタ株式会社トレーニングセンター
後援：エレクタ株式会社

2019 令和元

第34回セミナー
開催日：7月6日
推進委員会委員長：溝脇 尚志
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：山内 智香子
実行責任者：青木 友希
開催地：フクラシア大阪ベイ
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

第35回セミナー
開催日：7月13日
推進委員会委員長：溝脇 尚志
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：神宮 啓一
実行責任者：入江 大介
開催地：上野イーストタワー
後援：株式会社日立製作所

キャリアパス報告
（JASTRO第32回大会）

2022 令和4

まん延防止等重点措置終了に伴い、感染対策を講じながらセミナーは現地開催を再開。ランチョンセミナー・懇談会は見送った。
この年よりレジナビ出展に替えて、オンラインセミナー継続へ。

オンラインセミナー（第3回WEB開催）
開催日：5月14日
推進委員会委員長：溝脇 尚志
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：木元 拓也/和田 優貴

第38回セミナー
開催日：7月2日
推進委員会委員長：溝脇 尚志
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：木元 拓也
開催地：フクラシア大阪ベイ
後援：エレクタ株式会社

第39回セミナー
開催日：7月9日
推進委員会委員長：溝脇 尚志
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：和田 優貴
開催地：上野イーストタワー
後援：株式会社日立製作所

2024 令和6

オンラインセミナー（第5回WEB開催）
開催日：5月18日
推進委員会委員長：石川 仁
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：岸 徳子/村本 耀一

第42回セミナー
開催日：7月6日
推進委員会委員長：石川 仁
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：村本 耀一
開催地：エレクタ株式会社トレーニングセンター
後援：エレクタ株式会社

第43回セミナー
開催日：7月27日
推進委員会委員長：石川 仁
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：岸 徳子
開催地：森ノ宮医療大学
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

2012 平成24

第20回セミナー
開催日：6月30日
推進委員会委員長：西村 恭昌
小委員会委員長：内田 伸恵
総括責任者：内田 伸恵
実行責任者：中嶋 綾
開催地：KKRホテル大阪
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

日本放射線腫瘍学会25周年記念誌発刊。同誌で阿部光幸先生がセミナーへの期待について言及⑥。セミナー実行小委員会は公募制による「セミナー・レジナビ実行小委員会」に改組。

第21回セミナー
開催日：7月14日
推進委員会委員長：西村 恭昌
小委員会委員長：内田 伸恵
総括責任者：仲澤 聖則
実行責任者：戸田 一真
開催地：エレクタ東京本社
後援：エレクタ株式会社

キャリアパス報告
(JASTRO第25回大会)

2013 平成25

第22回セミナー
開催日：6月29日
推進委員会委員長：笹井 啓資
小委員会委員長：内田 伸恵
総括責任者：内田 伸恵
実行責任者：中嶋 綾
開催地：KKRホテル大阪
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

キャリアパス長期報告⑦

第23回セミナー
開催日：7月13日
推進委員会委員長：笹井 啓資
小委員会委員長：内田 伸恵
総括責任者：中山 優子
実行責任者：久保 亘輝
開催地：エレクタ東京本社
後援：エレクタ株式会社

キャリアパス報告
(JASTRO第26回大会)

2016 平成28

第28回セミナー
開催日：7月2日
推進委員会委員長：永田 靖
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：石原 俊一
実行責任者：堤 真一
開催地：KKRホテル大阪
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

第29回セミナー
開催日：7月16日
推進委員会委員長：永田 靖
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：若月 優
実行責任者：吉田 匡宏
開催地：エレクタ株式会社トレーニングセンター
後援：エレクタ株式会社

2017 平成29

第30回セミナー
開催日：7月1日
推進委員会委員長：永田 靖
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：余田 栄作
実行責任者：堤 真一
開催地：KKRホテル大阪
後援：エレクタ株式会社

第31回セミナー
開催日：7月15日
推進委員会委員長：永田 靖
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：野村 邦紀
実行責任者：青木 秀梨
開催地：株式会社バリアンメディカルシステムズ
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

キャリアパス報告
(JASTRO第30回大会)

2020 令和2

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、初の緊急事態宣言が発令される。
レジナビ開催中止。
セミナーは現地開催を中止し、初のWEB開催を実施。これまでに築いてきたネットワークを礎に、対面での交流が制限される状況下においても学びを継続できる新たな開催形態を実現した。

第36回セミナー
(第1回WEB開催)
開催日：7月11日
推進委員会委員長：溝脇 尚志
小委員会委員長：中村 聡明
総括責任者：西多 俊幸/前林 俊也
実行責任者：木元 拓也/入江 大介

2021 令和3

コロナ禍が継続し、緊急事態宣言が断続的に発令される中、セミナーは前年に続きWEB開催を実施。RTPSを用いた遠隔操作によるオンライン治療計画実習が取り入れられた。
従来の参加者追跡調査に加え、参加者がセミナーを継続的にフォローする関係の構築を目的とした「JASTROフォロワー事業」承認。

第37回セミナー
(第2回WEB開催)
開催日：7月3日
推進委員会委員長：溝脇 尚志
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：木元 拓也/入江 大介
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

2023 令和5

NExT解散（2023年1月）

オンラインセミナー
(第4回WEB開催)
開催日：5月27日
推進委員会委員長：石川 仁
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：木元 拓也/和田 優貴

第40回セミナー
開催日：7月1日
推進委員会委員長：石川 仁
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：和田 優貴
開催地：株式会社バリアンメディカルシステムズ本社
後援：株式会社バリアンメディカルシステムズ

個人情報保護法改正により、
フォロワー事業途中停止・凍結。

第41回セミナー
開催日：7月8日
推進委員会委員長：石川 仁
小委員会委員長：中村 聡明
実行責任者：木元 拓也
開催地：フクラシア大阪ベイ
後援：株式会社日立製作所

2025 令和7

オンラインセミナー
(第6回WEB開催)
開催日：5月10日
推進委員会委員長：中村 聡明
小委員会委員長：和田 優貴
実行責任者：山形 航/村本 耀一

第44回セミナー
開催日：7月5日
推進委員会委員長：中村 聡明
小委員会委員長：和田 優貴
実行責任者：山形 航
開催地：福岡リファレンス駅東ビル
後援：エレクタ株式会社

第45回セミナー
開催日：7月12日
推進委員会委員長：中村 聡明
小委員会委員長：和田 優貴
実行責任者：村本 耀一
開催地：虎ノ門ヒルズビジネスタワー
後援：株式会社日立ハイテク



第1回・第2回セミナーの熱き日々を振り返って

がん研究会有明病院　小口 正彦

JASTRO医学生研修医セミナーが30周年という大きな節目を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。歴代のJASTRO執行部の方々をはじめ、運営に尽力された多くの放射線腫瘍医、そして長きにわたり温かく支えてくださった企業の皆様。皆様の情熱が紡いだこの歩みが、今日まで発展的に継続されてきたことを、一会員として誠に嬉しく、感慨深い思いでおります。

私は、記念すべき第1回および第2回セミナーにおいて、微力ながら運営の末端で「下働き」を経験させていただきました。当時の克明な記録は板澤朋子先生の参加者進路追跡調査. 日放腫会誌（2006年）と『月刊新医療』（1995年10月号・1996年10月号）に譲りますが、ここでは私自身の記憶に刻まれている、創生期の熱気と舞台裏の光景を綴らせていただきます。

富士山を仰ぎ、未来を語った「作戦会議」

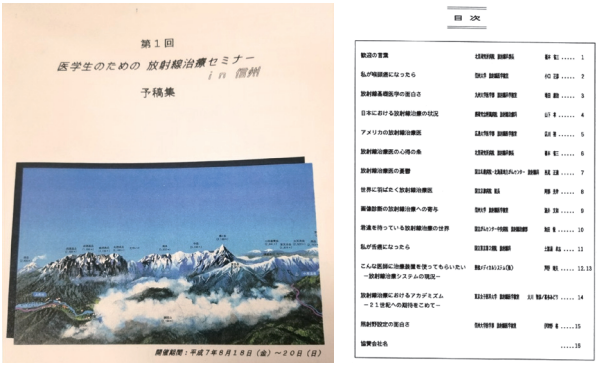
セミナー発足の種が蒔かれたのは、1993年から1994年にかけてのことでした。当時、放射線治療界を牽引されていた故･橋本省三先生、山下孝先生、土器屋卓志先生、故・伊津野格先生方、そして志を同じくする企業の故・谷義正氏、芦野靖夫氏、山田眞氏、大西美春氏らが、山中湖畔に幾度か集い、議論を重ねていらっしゃいました。

富士山を眼前に望むその場所で語られていたのは、日本の放射線治療の未来を左右する「人･物･金」の具体的な戦略です。治療機器の整備から診療報酬の在り方、そして何より次代を担う人材の育成について。私はカバン持ちとして同席させていただきましたが、その雰囲気はJASTROの前身ともいえる「システム研究会」の自由闊達な気風を受け継いだ、極めて真剣で、かつ夢のある作戦会議であったと記憶しています。

その討議の中で、最優先課題として浮上したのが「放射線腫瘍医の増員」でした。私の師である伊津野先生が、「夏休みに医学生を集めて、放射線治療の面白さを熱く語り、直接勧誘しよう」と発案されたのです。これに橋本先生が賛同され、JASTROの協賛を得て、初の試みとなる「医学生のための放射線治療セミナー in 信州」が産声を上げました。

手探りの中で始まった「おもてなし」

開催準備は伊津野先生を中心に、周到に進められました。全国の医学部へ案内を送り、有志企業からの寄付を仰いで学生の旅費を工面しました。宿泊先



第1回医学生のための放射線治療セミナーin信州 予稿集
美ケ原のコテージから眺める北アルプスを表紙に
（提供：ユーロメディテック株式会社 谷謙甫社長）

には美ヶ原高原の中腹にあるコテージを借り、講師陣は各地から手弁当で駆けつけてくださいました。

当時、診療科単位で医学生を対象とした宿泊型セミナーを行う試みは国内に前例がなく、資金調達や趣旨説明には多大な労苦を伴いました。あまりの好条件ゆえ、学生の間では「夏の信州へ旅費・宿泊費無料で招待など、何か怪しい勧誘ではないか」と当惑される一幕もあったほどです。

魂を揺さぶる「熱き講義」

1995年の第1回は25名、1996年の第2回は26名の学生が全国から集まりました。信州大学の講堂で行われたプログラムは、今振り返っても驚くほど豪華で、濃密なものでした。

放射線基礎医学の深淵から、日米の治療現場の差、臨床医としての心得、さらには「もし自分ががんになったら」という切実な問いかけまで。レジェンド級の講師陣が、これからの時代を担う若者たちに向け、魂を込めて語りかけました。また、固定具シェル作りや低融点鉛合金ブロック作成などの体験実習も盛り込まれ、学生たちは初めて触れる技術に目を輝かせていました。演題のリストを眺めるだけで、当時の先生方がどれほどの熱量でこの未知なる試みに賭けていたかが伝わってきます。

美ヶ原の風と、語り明かした夜

講義が終われば、舞台は標高の高い美ヶ原高原へと移ります。夜のバーベキューでは、教官も学生も入り混じって交流の輪が広がりました。

特に印象深いのは、屋外での夜間講演です。木々の間にシーツを張りスクリーン代わりにしたのですが、山の夜風に吹かれて映像がゆらゆらと揺れてしまいます。決して完璧な視聴環境ではありませんでしたが、揺れる画面を食い入るように見つめ、夜更けまで語り合ったあの時間は、何物にも代えがたい「手作り」の温かさがありました。

若手医局員たちが準備した朝食や、歓声が上がった流しそうめん。帰り際に学生たちが残した「がん治療への見方が変わりました」「こんなに熱心な話を聞いたのは初めてです」という言葉に、私たちは疲れも吹き飛ぶような手応えを感じたものです。取材の際、橋本先生が仰った言葉が今も耳に残っています。

「講義の内容は忘れても、共に食卓を囲み語り合った記憶は一生の思い出になる。それが人と人の繋がりを紡ぐのだ」



学生もスタッフも参加者全員が着用した鮮やかな黄色のTシャツは、セミナーの活気と連帯感の象徴であった



第27回セミナーの時に先輩の意思を繋ぐ3世代
右から中村聡明先生、板澤朋子先生、小口
未来の放射線治療を共に創る、熱い仲間を待っています！（提供：中村聡明先生）

大先輩から受け継ぐバトン

土器屋先生は、当時こう仰っていました。

「他科に進む人がいても構わない。ここで得た理解は、将来必ず放射線治療への協力関係として役立つ」

また、伊津野先生は「数年後にこのセミナーの本当の意義が判定される」と、継続の重要性を説かれました。

30年という月日が流れ、当時の参加者からは現在の放射線治療界を支えるリーダーが数多く誕生しています。この30周年記念誌は、まさに先達が掲げた理念への「最高の中間評価」と言えるでしょう。放射線腫瘍学がどれほど進歩し、社会情勢が変わろうとも、このセミナーの根底にある「人と人を紡ぐ熱意」が変わることはありません。この伝統が、次なる30年に向けて、さらに豊かに発展していくことを切に願っております。

1995年プログラム

・歓迎の言葉（橋本省三先生）
・私が喉頭癌になったら（小口正彦）
・放射線基礎医学の面白さ（増田康治先生）
・日本における放射線治療の状況（山下孝先生）
・アメリカの放射線治療医（広川裕先生）
・放射線治療医の心得の条（橋本省三先生）
・放射線治療医の憂鬱（西尾正道先生）
・世界に羽ばたく放射線治療医（阿部光幸先生）
・画像診断の放射線治療への寄与（酒井文和先生）
・君たちを待っている放射線治療の世界（池田恢先生）
・私が舌癌になったら（土器屋卓志先生）
・こんな医師に治療装置を使ってもらいたい（芦野靖夫氏）
・放射線治療におけるアカデミズム～二十一世紀への期待をこめて～（大川智彦先生）
・照射野設定の面白さ（伊津野格先生）

1996年プログラム

・放射線治療・世界に向けて（阿部光幸先生）
・我が国の対がん戦略（池田恢先生）
・私の伴侶―悪性リンパ腫の放射線治療（早渕尚文先生）
・Brachytherapy―今新たな旅立ち（山下孝先生）
・日本の放射線治療の現状（広川裕先生）
・放射線治療とコンピュータ（芦野靖夫氏）
・骨転移の画像診断（徐貴淑先生）
・子宮頸がんに対する放射線治療（喜多みどり先生）
・粒子線によるがん治療（辻井博彦先生）
・放射線治療の現在の問題点と将来展望（坂井邦夫先生）
・野外シンポジウム：学生諸君に期待すること（橋本省三先生、西尾正道先生、大西洋先生、尾形均先生「心配ご無用！」）

参考文献

・『月刊新医療』1995年10月号
・土器屋卓志：「医学生のための放射線治療セミナーin信州」開催報告.
JASTRO NEWSLETTER 32: 20, 1995
・『月刊新医療』1996年10月号
・板澤朋子ほか：第1回～第8回「医学生のための放射線治療セミナー」参加者進路追跡調査.
日放腫会誌 17: 215-219, 2006
・阿部光幸：JASTRO 20年の歩み―誕生の経緯と明日への期待.
日放腫会誌 20: 47-54, 2008



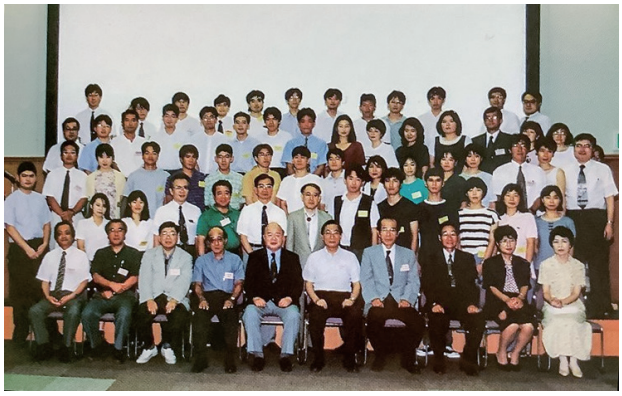
第3回医学生のための放射線治療セミナーを開催して

（株）日立製作所 ひたちなか総合病院放射線治療科　三橋 紀夫

第1回ならびに第2回のセミナーは信州大学の伊津野先生らが中心となって講義と実習を通して医学生に放射線治療を知ってもらおうと企画されたものでしたが、この革新的な試みがJASTROの理事会で取り上げられ、第3回セミナーからはJASTROの事業としてサポートすることが決定されました。そこで、JASTROの全面的な援助を受けて、恩師である新部英男先生を中心に企画して、1997年8月1日から4日まで3泊4日で群馬大学が主催しました。全国から医学生33名が参加してくれましたが、当時はオウム真理教が信者を増やすべく、積極的に若者を勧誘していたこともあり、3泊4日のセミナーに無料で参加できるような甘い話があるはずはなく、何か怪しい集団の勧誘セミナーではないかと、両親に参加を反対された医学生もいたようです。

セミナー初日は夕方から前橋テルサでの歓迎レセプションで始まり、医学生と講師の顔合わせを行いました。2日目は大学の刀城会館で、午前中に理事の先生方を講師に迎えて「世界に羽ばたこう」と題したセッションと「がんを克服して」と題した患者さんとの対話の2つのセッション行い、午後はコーヒーブレイクを挟んで「放射線治療を高める工夫」と題するセッションを行いました。セッション終了後はバスでわたらせ渓谷の国民宿舎サンレイク草木へ移動して夕食を済ませ、午後8時から若い教室員による「勉強になった症例」と題したセッションを行いました。3日目は朝8時30分から「自慢の症例」と題した話題提供と「がん治療のなかでの放射線治療の役割」と題したセッション、さらに「がんと共に生きて」と題した治療患者さんとの対談を行いました。午前中のセッション終了後は午後4時まで昼食とリクレーションで気分転換をし、最後に「放射線治療は面白い」と題したセッションを行い、その後全セッションを通しての質疑応答を行い講義は終了となりました。午後6時からはバーベキュー形式のサヨナラパーティーを行い、セミナーのオリジナルTシャツを着て夜遅くまで親交を深めました。最終日は講評と終了証の授与を行った後に、バスで足尾に移動して銅山を見学し、日立駅で解散となりました。

セミナーでは橋本省三、阿部光幸、池田 恢、大川智彦、河内清光、喜多みどり、酒井邦夫、佐々木武仁、高橋正治、田中良明、山下 孝の錚々たる重鎮の先生方が講師を務めてくださり、実りあるセミナーとなったことで参加学生のうち11名（33%）が放射線治療医の道に進んでくれました。先輩が示すロードマップは、目標達成の可視化を可能とし、将来のキャリアに関する目標意識を高めることで、自身の成長を具体的にイメージできると考えられています。現在は当時のように卒業と同時に進路を決定することはなく、多くの診療科で研修を積んだのちに進路を決定するシステムに変更されています。しかし、「鉄は熱いうちに打て」をモットーにEarly Exposure Programを今後も継続していただきたいと願っています。





「第4回医学生のための放射線治療セミナー in 新潟」の思い出

新潟県立がんセンター新潟病院 放射線治療科部長　松本 康男

平成10年（1998年）7月30日～8月2日、新潟大学医学部放射線科教授であった酒井邦夫先生の主宰のもと、「第4回医学生のための放射線治療セミナー in 新潟」が開催されました。参加者は、学生20名（男12，女8）、講師25名、スタッフ22名、聴講者2名でした。7月31日の朝、新潟大学構内の有壬記念館にてセミナーが開始され、15時過ぎに講義を終えたのち、新潟県内でも有数のスキーリゾートであり豪雪地帯として知られるグリーンピア津南（現：ニュー・グリーンピア津南）にバスで移動しました。現地では夕方から21時頃まで、「医療の中の放射線治療」をテーマにシンポジウムが行われました。このとき、先に現地入りしていた一部の講師の先生が温泉でくつろぎ、浴衣姿のまま会場に姿を見せる場面もあり、終始どこかアットホームで和やかな雰囲気に包まれていました。その後は、リゾート内のコテージなどに新潟の銘酒が持ち寄られ、講師陣、参加学生、そしてスタッフも入り交じって、夜遅くまで大いに語らい、盛り上がりました。8月1日（土）も、朝早くから夕方まで充実した講義が続きました。昼食は同施設のバーベキューガーデンで盛大にBBQを楽しみ、この日のために特別に制作したTシャツを着て集合写真を撮影したはず…なのですが、残念ながら写真は残っていませんでした。Tシャツのことは強く記憶に残っています。というのも、筆者もその準備係の一人であったためです。四半世紀を経た今でも記憶は鮮明で、若い医局員が第4回セミナーのロゴをデザインしてくれた一方で、サイズの取りまとめにはなかなか苦心しました。Sは何枚、LLは何枚必要かと頭を悩ませたものの、セミナー終了後にはサイズが合わなかったとの声が講師の先生方からいくつか寄せられ、かえってそのことが印象に残る一因となりました。もう一つの印象深い出来事は、ある講師の先生を津南から湯沢までお送りした際のこと、講演後に早めに出発されるとのことで、筆者の運転で会場のホテルから湯沢駅へ向かいました。その道中、ブロードウェイのミュージカルや演劇、オペラなど、当時の筆者には馴染みのなかった芸術分野のお話を数多く伺うことができたことです。当時、中堅医局員でスタッフとして裏方の業務に追われ、セミナーでの講義をほとんど聴講することができませんでしたが、今回、原稿執筆にあたり、セミナーの準備会議の資料やプログラム、そうそうたる講師陣の一覧、抄録などに改めて目を通しましたが、「多少仕事をサボってでも聴講しておけばよかった」との思いが募るばかりであります。また、当時の写真を掲載できればと考えましたが、かろうじて見つかった1枚の集合写真は、印刷では個々の先生方のお顔を判別することが難しく、掲載を断念せざるを得ませんでした。セミナー期間中には様々な場面で撮影が行われていたはずですが、残念ながら大学の医局にも写真は一枚も残されておりませんでした。

当時の筆者は、学生の皆さんが超一流の講師の話を聞いても、いわば「馬の耳に念仏」になってしまうのではないかと思っていました。旅費や宿泊費が不要ということもあり、このセミナーに真面目な関心を持って集まってくれる学生がどれほどいるのか、正直なところ疑念も抱いていました。しかし現在では、本セミナーは、参加した学生の中から一人でも放射線治療医を志す人材を生み出すための、非常に貴重な機会であったと実感しております。

今回の寄稿にあたり、当時スタッフの一人としての断片的な回想になりましたことをご寛恕いただければ幸いです。



第５回医学生のための放射線治療セミナー 回想録

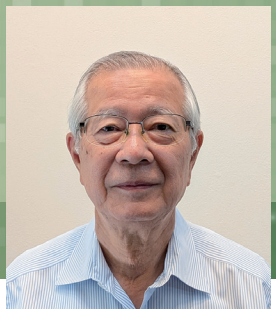
浜松医科大学　中村 和正

第5回セミナーを九州大学が主管した時、丁度当時の放射線治療グループだった私が、セミナーの実務をさせていただきました。かなり昔のことで、残念ながら当時の資料も残っていないので、かすかな記憶を頼りに寄稿しています。第4回の新潟大学でのセミナーを下見に行かせていただきましたが、こんなリゾート地で楽しい会を開催するのか、と少し責任の重さにたじろいだ記憶が残っています。当時の増田康治教授と相談しながら、九州の豊かな自然や文化をいかに活かすかということを考えながら、セミナー会場を選定しました。

セミナー前日には、当時できてまもない、運河（キャナル）が流れるショッピングモール、キャナルシティ博多に併設されたワシントンホテルに参加者に宿泊してもらいました。きっと参加者は、当時はとても斬新であったキャナルシティ博多（今でも素敵ですが）に感動したのではないかと思っています。翌朝から、まず九州大学の講堂で講義プログラムをスタートさせました。各先生のご講演はいずれもすばらしい内容でしたが、中でも京都大学名誉教授・阿部光幸先生のご講演に深く感動したことを覚えています。長年にわたり日本・世界の放射線治療を牽引され、数多くの優れた放射線腫瘍医を育ててこられた阿部先生の講義を間近で拝聴できたことは大きな収穫のひとつでした。

二日目は、貸し切りバスで大分・由布院の「国民宿舎　由布山荘」に向かいました。午後の講演を終えた後は、源泉かけ流しの温泉で旅の疲れを癒し、夜の懇親会へと続きました。二次会、三次会と宴は夜が更けてもなお続き、学生さんたちと放射線治療の将来について、ディープな意見交換ができたのではないかと思っています（20年以上前はこのような感じでしたが、今の時代ではさすがに難しいかも、とも思います）。

このセミナーが持つ意義は二つあると思います。一つは、豊富な経験を持つ先達から直接薫陶を受けられること、もう一つは、全国各地から集った、将来同じ道を歩むかもしれない仲間たちとの横のつながりが生まれることです。福岡、由布院の夜（？）に芽生えたご縁が、その後の各人のキャリアに少しでも良い影響を与えたのであれば、第5回の主幹校として望外の喜びです。由布院で、観光客の方から観光バスの添乗員さんに間違えられたことや、由布山荘で酔っ払って、後輩のS先生のお気に入りのネクタイを、浴衣の帯と間違えて締めて温泉に入りにいったこと（S先生、すみません）など、楽しい（？）想い出としても残っています。



第6回医学生のための夏季セミナーを振り返って

東北大学名誉教授／杜の都産業保健会理事長　山田 章吾

開催にあたって述べたこと

日本放射線腫瘍学会が主催する学生のための夏季セミナーも、6回を数えるに至りました。最初の数回は信州で開催され、その後全国持ち回りになりました。私も当初、学生のためにここまでする必要があるのかと思っておりました。また学生の方も旅費、宿泊費無料というおいしい話に、カルト集団のような勧誘かと不審に思い、親に反対されて参加を辞退した学生もいたと聞いています。その後、先輩から後輩に話が継がれ、そのような勧誘会ではないということが理解され、年々参加者が増え、今回はとうとう参加学生を選抜せざるをえない羽目になりました。

ところで、がん治療の中で放射線治療の占める比率は欧米では50%に及びますが、日本では20%前後にすぎません。しかも、最も比率の高い米国で「がん患者はEBMに基づいた治療を受けていない」という論文が掲載されています。理由は「放射線治療を受ければ利益が得られる患者に適正な治療が行われていない」という内容です。日本では放射線治療に関する評価が低く、患者さんは不利益を被っています。大学の講義をみても放射線治療についての講義がほとんどない大学もありますし、また医師国家試験における放射線治療の出題もわずかで、放射線治療の認知度が低く専門医も極めて少ないのが現状です。

高度高齢化社会を迎え、がん患者さんは年々増加し、また世界の潮流からしても放射線治療件数は年々増える傾向にあります。いま放射線治療医は獅子奮闘、猫の子の手を借りたいくらい頑張っているのですが、絶対的なマンパワー不足に泣いています。放射線治療の現状と将来性について皆さんに知っていただき、放射線治療に興味を持っていただくために、放射線腫瘍学会のなけなしのお金を使って、この夏季セミナーを開いています。

放射線治療についてよく学び、この夏が皆さんにとって一生の良い想い出となってくれれば幸いです。できれば全員放射線治療医になって、私共の後を継いでくれればこんなうれしいことはありません。

セミナーの日程

2000年8月3日、4日とセミナーおよび懇親会が行われ、5日は霧の中、蔵王のお釜を見学しました。その後、山形に行き、猛暑の中、松尾芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蝉の声」で有名な“山寺”の長い階段を登りました。夜は仙台に戻り特等席で花火見物の予定でしたが、あいにくの雨で、ホテルの屋上で、音だけの楽しみになってしまいました。6日には全員無事解散となりました。

学生の感想文では、日ごろ聞けない放射線治療の話をわかりやすく集中的に聞くことができたなどと、大変好評で、彼らにとっては一生の良い思い出になったようです。

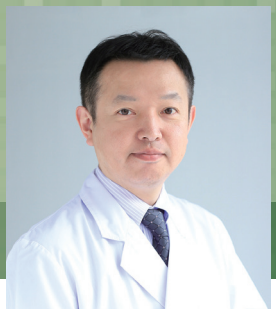
収支はもちろん赤字で、当時私はJASTROの教育委員長をしていたこともあり、次年度からは会員にも寄付をお願いすることにしていただきました。

驚くべきことに、その後他の学会でもこの“青田刈りセミナー”が行われるようになったことを知りました。

みんな希望に満ちて、若く溌剌としていた、あの頃をいま懐かしく思い出しています。



宮城蔵王“お釜”にて



第7回セミナー主幹大学 札幌医科大学として

札幌医科大学　染谷 正則

第7回医学生セミナーは、JASTRO会員を対象とした第3回夏季セミナーとの合同開催という新たな試みのもとに医学生、研修医、そして第一線で活躍する指導的立場の専門医が集まる意欲的な企画でありました。会期は2001年8月3日から5日までの3日間、札幌市中央区のタケダビルで開催されました。当番世話人は当講座の晴山雅人教授（当時）が務められ、私も教室員の一人として準備・運営に携わりました。ちょうど函館出身の人気グループのコンサートと日程が重なりホテルの手配が大変であったようですが、全国から40名の医学生にご参加いただき、真夏の札幌に熱気あふれる学びの場が生まれました。

初日は、小線源治療、頭頸部腫瘍、食道・肺癌、悪性リンパ腫など放射線治療の主要分野についての講義が行われました。また合同企画としてPRCM（Practical Review of Cancer Management）を実施しました。ベテラン医師が提示する症例に対し若手医師が診断や治療方針を発表する実践的なプログラムで、かつて日医放北日本地方会で行われていたイベントを再現したものです。会場には独特の緊張感が漂い、学生にとって臨床の思考過程を間近で体感できる刺激的な機会であったと思います。

初日の講義後にはサッポロビール園で合同懇親会を開催し、世代や立場を超えた交流が生まれました。

2日目は阿部光幸先生のご講演に続き、放射線生物学、炭素線治療、定位放射線治療、緩和照射など幅広いテーマの講義が行われました。基礎から最先端医療、さらに終末期医療までを含む放射線腫瘍学の広がりを示す構成でした。夕刻には定山渓温泉へ移動し、西尾先生、土器屋先生のご講演の後、懇親会と修了証書授与式を行いました。温泉地という開放的な環境もあり、議論は夜遅くまで続きました。

最終日は小樽を訪れ、街並みを散策した後に解散しました。3日間で築かれた横のつながりは、その後も学会などで再会するたびに大きな力となっています。本セミナーの意義は、全国の同世代の仲間との連携だけでなく、学会の重鎮の先生方とも親しく交流できた点にあったと感じています。私はこのセミナーを契機に勧誘活動にも力を入れ、翌年には5名の入局者を迎えることができました。セミナーの成功が教室の発展にもつながった象徴的な出来事であったと感じています。



サッポロビール園での合同懇親会



定山渓温泉での夜の親睦会



小樽オルゴール堂前での集合写真



第8回セミナー
語り合おう、君とあなたの夢・未来

大阪大学名誉教授　井上 俊彦

演習とプレゼンテーションに時間を割いた。「講義だけで済まさない。一生を決めるほどの興味を持って帰ってもらう」ことを目指した。

18名の参加者を3人一組の6チームにし、各1名の若手教室員をチームリーダに配した。病院でのサイバーナイフ、固定具作成、ファントムを使った小線源治療実習のAグループと視聴覚教室でのモデル患者（肺癌，子宮頸癌、食道癌）に対する治療計画実習のBグループに分けた（90分で入替え）。演習後、神戸市北区の関西学生セミナーハウスに移動。夕食後もチームリーダの指導下に演習のまとめと翌日のプレゼンテーションの資料を作成した。

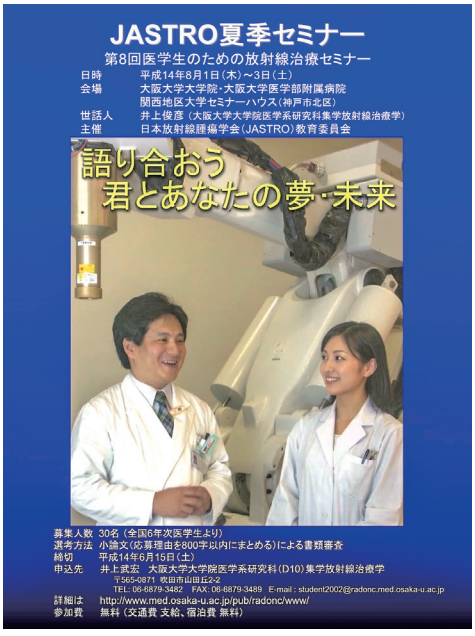
二日目は外照射・サイバーナイフ・小線源治療・FOCUSの復習と代表的疾患の講義と関連チームの発表・質疑を織り込んだ。最後は、橋本省三先生の司会で阿部光幸先生に「夢を語ろう」。大トリは山下孝先生の司会で伊津野格、土器屋卓志、西尾正道、広川裕の諸先生と学生代表による円卓会議。夕食後、修了証書と記念品を手渡して締めくくった。

「座学だけでなく、演習が必須。空念仏でなく、庭掃除・炊事・洗濯・風呂焚きが必要」と私は思う。初歩教育で手を動かすのが最適だと考えた。「そうだ。主訴・既往歴・現症・検査成績を揃えた仮想患者データを作成し、これをもとに若手医師の指導下に治療計画を作る。チーム毎に発表させ、優劣を競い、演習で当たらなかった疾患についても理解を深める。教室員にも、貴重な経験になった」と自画自賛した。

CMSジャパンの芦野靖夫氏にお世話になった。治療計画装置を3台持ち込んでもらった。その後のセミナーの柱になった。芦野氏自身も会社に多数の装置を完備した研修室を整え、独自の演習コースを開始した。

「航海に必要なことは航路の決定である。もっと大切なのは、実際に辿った航路であり、記録と見直し・保管である」と思う。新米医師の私が治療した小児患者とのお付き合いは55年余にもなる。お陰で、私は放射線治療について多くを学んだ。新たな船出（治療医計画）から船旅（治療）とその後の長い歳月（観察）で、想定外の局面に遭遇し、回顧する日が来る。その思いを次世代に繋ぐことが大切である。

医学部5回生の孫娘が「放射線科実習で上咽頭癌の放射線治療計画をさせてもらった。指導教官から褒められた」と報せてきた。私の教授時代の新しい試みが放射線治療学の教育現場に根付いていることを知った。



第8回セミナーポスター



第9回セミナー開催の思い出 30周年に寄せて

北里大学名誉教授　早川 和重

第9回医学生のための放射線治療セミナーは、JASTRO会員対象の第5回放射線腫瘍学夏季セミナーと合わせて「第3回JASTRO夏季セミナー」として、神奈川県葉山町の湘南国際村センターで開催させて頂いた。この年は、次年度から始まる卒後臨床研修必修化の影響を受けて参加者も集まらず、理事会や教育委員会でもセミナー存続について議論した記憶がある。それでも医学生の参加者が11名おり、第5回放射線腫瘍学夏季セミナーの参加者95名、講師陣43名、大会運営スタッフ20名を加えると約170名の方々の熱気を感じられたことは医学生に有意義な時間を提供できたのではないかと思っている。

プログラムは、8月1日（金）午後～3日（日）午前にかけての2泊3日で、講師陣には、理事ならびに教育委員の先生方を中心にセミナー受講経験者にもご協力をお願いして編成した。本誌編集委員長の板澤朋子先生にもお手伝い頂いたことは、その後のセミナー発展に繋げられたのではないかと思っている。

初日の「第一部：放射線治療に魅せられて」では、阿部光幸先生の「1. 放射線腫瘍学の歴史と夢」と題した基調講演で始まり、「2. 放射線治療の実際」、「3. 放射線治療の特徴と役割」、「4. 放射線腫瘍学の魅力」へと進み、放射線腫瘍学夏季セミナーのサテライトとして企画したテキサス大学MDアンダーソンがんセンターのLuka Milas教授によるSpecial Lecture後の合同レセプションでJASTRO会員の方々と交流時間を設けた。2日目の「第二部：放射線腫瘍学の進歩と夢を語る」では、「5. 放射線治療技術の進歩」、「6. QOLを高める理想のがん治療」について理事の先生方からご講演を頂き、夕方のラウンドテーブルディスカッション「7. 放射線腫瘍学の現状と将来を語る」では、早渕尚文先生司会の下、第1・2回世話人の伊津野格先生を交えて熱い議論を行って頂いた。18時からのレセプション「湘南の海風とワイン」では屋外で海風にあたりながら、講師陣、医学生にはおそろいのTシャツを着てもらい、皆が生ビール・ワインを飲みながら楽しそうに語り合っている光景は忘れられない。その後の合同懇親会では地元佐島漁港で当日朝採れたての鮮魚など国際村センターからの美味しい料理とお酒を楽しみながら、夜遅くまで盛り上がった記憶は鮮明に残っている。3日目の「第三部：放射線治療（計画）を体験しよう」では「8. 放射線治療計画実習」として、芦野靖夫様（当時CMSジャパン）のご協力で実際の治療計画装置を用いた体験実習を3時間行い、最後に晴山雅人先生（当時JASTRO教育委員長）から修了書を授与された後、合同ランチョンパーティを行い、解散となった。

本セミナーの開催にご協力いただいた方々ならびに放射線腫瘍医を目指してくれた方々には心より感謝申し上げる。学会場でお会いできた時には是非お声掛け頂きたい。また、本記念誌の発行にご尽力頂いた関係各位に深甚なる謝意を表する。







想いをつないだ若手の挑戦、そして、“NExT”へ…

日本医科大学武蔵小杉病院　板澤 朋子
公益財団法人田附興風会 医学研究所北野病院　今堇倍 敏行

黎明期

JASTROが発足した1988年5月当時、本邦で独立した放射線腫瘍学講座をもつ医学部はごく限られていた。大学病院においてさえ放射線治療を専門とする医師は少数であり、とりわけ若手は診断業務との兼任が大多数であった。卒後、大半の医学生は大学の各診療科に直接“入局”しており、“マイナー科”である放射線科を選択し、さらに少数派である放射線治療の道へ進む人材は稀有であり、現場における放射線腫瘍医不足は深刻であった。

1994年秋、橋本省三・山下孝・土器屋卓志・伊津野格らが立ち上がり、「問題解決には医学生へ放射線治療の魅力をアピールすることが不可欠」として、医学生向け放射線治療セミナー（以降セミナーと略）を開催する方針となった。1995年8月、伊津野を世話人として「第1回医学生のための放射線治療セミナーin信州」が1泊2日の宿泊形式で松本市にて開催された。全国より25名の医学生が参加し成功裡に終わったことから、セミナーはJASTRO理事会で正式に事業として承認され、翌年も同じく松本にて開催となった。以降は全国の大学教授等が持ち回りで世話人を担うこととなった。

参加費は無料～数千円程度、医学生の夏季休暇に合わせ8月開催とされた。遠方からも参加しやすいよう、旅費・宿泊費は主催者側で負担した。現在もこうした教育活動にJASTRO教育基金が活用されているが、元をたどれば、1993年に京都で開催されたInternational Congress of Radiation Oncology（ICRO'93）の大会長であった阿部光幸が、放射線腫瘍学に関する教育・研究の振興を願いJASTROに寄付した学術振興基金が礎である。

当番世話人は、講義・実習に加え、開催地ならではの工夫を凝らしたイベントを盛り込んだ。懇親会や観光などを通じて医学生と現役医師とが交流し、放射線治療の魅力を熱く語る勧誘活動の場となった。懇親会では「治療医になります」宣言が出ることもあり、ベテランも若手も大いに沸き上がった。回を追うごとにセミナーは盛り上がりを見せ、第6回（2000年、仙台）の参加者数は54名に至った。



第3回セミナー（群馬）集合写真 足尾銅山にて
（1997年8月4日）

セミナー存続危機

順風満帆と思われたが、“新医師臨床研修制度（2004年導入）”により転機が訪れる。卒後2年間の初期臨床研修が必須となり、臨床研修病院とのマッチングシステムが導入された。医学生にとって、進路選択の対象は診療科ではなく臨床研修病院となった。放射線治療設備のない臨床研修病院もあり、がん診療に初期研修医として携わっても放射線治療に触れる機会なく研修を終えることが示唆された。こうした背景から、「放射線治療に興味をもつ人材が減少する」と予想された。医学生が直接“入局”しなくなることから、2004年にはセミナー参加対象を初期研修医まで広げ、名称も「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」に変更された。

しかしながら、新制度の波は予想以上であった。開始前から影響がみられはじめ、セミナー参加者数は、第7回（2001年、札幌）35名、第8回（2002年、大阪）18名と急減、制度導入前年の第9回（2003年、湘南）は、とうとう10名と過去最低数を記録した。学生の間に診療科を選択する必要がない、という時代の流れを反映するかのようであった。1999年に若手の医師向けとして開始された「放射線腫瘍学夏季セミナー」が好評であった一方、医学生向けは主催者側の負担が大きいことからも、「医学生向けは意味がない、お金や労力の無駄遣いである」という風潮が広がり、JASTRO内でも当然のように“セミナー打ち切り論”があがった。卒後教育の充実が、皮肉にも卒前教育の不要論に繋がったのである。

再会と挑戦

話は遡ること2001年夏。かつて第3回（1997年、群馬）に医学生として参加した筆者らは、札幌で開催された「放射線腫瘍学夏季セミナー」にて放射線腫瘍医として再会を果たした。“マイナー科”のさらにマイナーな存在の放射線治療を志す同年代の仲間は非常に貴重であった（現在もそうではあるが…）。また偶然にも同回から医学生向けと医師向けとが併催となっており、懇親会等で医学生と接する機会にも触れた。こうしてセミナーを軸に、所属施設を超えた交流が始まった。翌年、翌々年、と、各地の学会においても交流は続いた。

この再会は偶然であったのか、必然であったのか？そんな好奇心が沸いた2003年秋、JASTRO学術大会において医学教育関連演題を偶然目にした。これに触発され、自分たちが参加した第3回（1997年、群馬）の進路選択状況を自主調査してみようとの話が盛り上がった。

そのような中、“セミナー打ち切り論”勃発を耳にした。“節目である第10回（2004年、久留米）を以て医学生向けセミナー事業を終了とする。第10回についても、参加者の応募状況に依っては開催しない。”という内容に衝撃を受けた。仲間を結び付けた原点であるセミナーの消滅危機を知り、その存続を願っても、政治力のない若手は無力であった。「せめてセミナーの成果や良さを参加者の立場から伝えたい」という思いが湧いた。

そこで筆者らは、説得力のある数値を示すべく、



放射線腫瘍学夏季セミナー合同懇親会 サッポロビール園にて（2001年8月3日）

自主調査の結果をまとめ、旧JASTRO誌に発表した[1]。参加後7年時点で、放射線科選択率が55％、放射線治療専攻率は36％という結果であった。自分たちにも驚愕の数字であったが、黎明期に尽力された大先輩方にはより大きなインパクトを与え、セミナー開催が放射線腫瘍医増加に寄与しているのではという大きな期待が寄せられた。

一方、厳しい意見も寄せられた。興味を持って参加した医学生が対象というバイアスがあるため、放射線腫瘍医増加に正の影響があるとは言えない、と。これに対し、過去の全参加者の進路調査を後ろ向きに行いつつ、行動科学の手法を用いてセミナーの意義を前向きにも評価する、という発想に至った。しかし、個人情報保護法の全面施行が翌年に迫る中、参加者名簿入手はもちろんのこと、自主調査には限界があった。

そうした折、「公式の進路調査という立ち位置をとれるようにJASTRO研究調査に応募してはどうか」との助言を先人より頂いた。研究計画について有償で外部IRB審査を受けるなど、今では当たり前のことも当時では珍しく、戸惑いの連続であった。「卒前におけるセミナー形式専門的教育がキャリアパスに与える影響の検討；参加者の視点で見たJASTRO学生セミナー」と題された研究は、平成16・17年度JASTRO研究調査として採択され、学会公式のセミナー追跡調査研究班としての基盤が形成された。

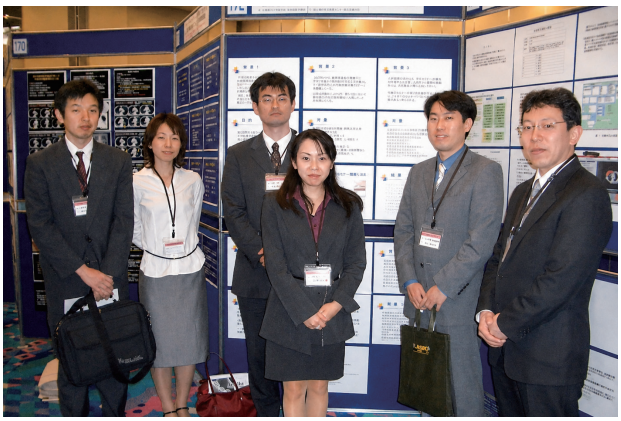
採択後、参加者の進路調査に取り掛かった。まず、各回の当番世話人や関係者に依頼し第1～8回参加者名簿の入手を進めた。ほとんどが紙媒体であり、第2回（1996年、松本）のデータは一部欠損していたなど、容易な道のりではなかった。それでも、JASTRO研究調査であったことが奏功し、徐々に収集・データ化が進んだ。次に、参加者の出身大学放射線科医局に進路調査状を発送した。問い合わせた全大学から返書を頂いたが、「進路不明」との回答も少なくなかった。そのため、氏名や出身大学名を用いてインターネット上で進路調査を行った。全体像を把握するまでには数か月を要した。

セミナーに関する意識調査にはアンケート方式を採用した。質問事項作成や回答の収集準備を進路調査と並行して進めた。学会公式事業でさえ紙媒体がまだまだ中心であった中、回答率上昇を企図してウェブ上でも回答可能な体制を整備した。進路調査およびアンケート準備が整った時点で一斉に意識調査への協力依頼を発送、ウェブ体制も貢献し海外在住の元参加者からも回答を得られ、アンケート回収率は74.8％に至った。

研究調査の傍ら、2004年にはセミナー参加者の前向き追跡およびセミナー運営サポートを開始した。セミナー当日は、実習補助や懇親会での勧誘活動にとどまらず、JASTRO理事や各大学の教授へ、セミナーの意義について積極的にアピールした。最後の開催かもしれないと危惧を抱いていた筆者らに



第10回セミナー（久留米）治療計画実習 築水会館にて
（2004年8月7日）



JASTRO学術大会ポスター発表
第3回セミナー参加者とともに幕張プリンスホテルにて
（2004年11月19日）

とって、次年度の当番世話人から「来年も手伝ってもらえるかな？」と最終日にお声がけを頂いたことは、何事にも代えられない報酬であった。この年のセミナー参加者数は、新医師臨床研修制度導入年とあって前年と同数の10名であったが、翌年の第11回（2005年、奈良）は進路検討中の2年次初期研修医が多く参加し、35名に回復した。

2005年は、がん対策基本法制定に向け、放射線腫瘍医のマンパワー不足が緊急課題として挙がった年であった。JASTROで「放射線腫瘍医増加のためのAd hoc委員会」が編成され、筆者（板澤）も委員に選出された。第18回JASTRO学術大会で「放射線腫瘍医を増やすためのシンポジウム」が開催され、放射線腫瘍医育成につながる重要イベントとして、セミナーは学会からのお墨付きをいただくこととなる。“セミナー打ち切り論”からの大逆転である。

そして、NExTへ…

2006年春、セミナー運営に積極的に関わる有志団体「NExT（New Education x Training）」が立ち上がった。初代代表は第1回（1995年、松本）参加者である中村聡明。NExTはJASTRO理事会の承認を得た上で教育委員会にオブザーバーとして参加し、公式活動を開始した。第12回（2006年、熱海）当番世話人および事務局と連携して、治療計画実習の素材を選びテキストを作成、当日の運営補助（司会進行やチューター）にも十数名が携わることになった。手探りの活動ではあったが、和気あいあいとした雰囲気の中で一丸となって準備を進めた。当日まで不安は絶えなかったが、蓋を開けてみれば実習は大いに盛り上がり、参加者もスタッフも終始笑顔が途絶えなかった。夜の砂浜に座り、みなで並んで見上げた熱海の花火は忘れられない。この年のセミナー参加者数は35名、うち11名が放射線治療専門医となっている。翌2007年、中村は正式にJASTRO教育委員となり、NExTがセミナー支援を続けていく基盤が出来上がった。セミナーを通じた活動の中、共感した若手が徐々にNExTに加わっていった。さながら、ロールプレイングゲームでの“○○がなかまにくわわった!!”感覚であった。

筆者らは、2006年に「第1～8回医学生のための放射線治療セミナー」参加者進路追跡調査[2]、2007年に平成16・17年度JASTRO研究調査の最終報告[3]、をそれぞれ発表し、セミナー追跡調査研究班としての活動は一段落した。以降、セミナー支援や追跡調査の中心はNExTに移る。発足から20年を経過し法人化を迎えたJASTRO同様、まさに新時代の幕開けであった。

※文中敬称略

※文中参加者数は、医学生および初期研修医の数（後期研修医や他職種参加者を除く）

参考文献

1) 今堇倍敏行，内野三菜子，板澤朋子，染谷正則，尾藤誠司
「第3回医学生のための放射線治療セミナー」参加者進路追跡調査－参加後7年を経過して－
J Jpn Soc Ther Radiol Oncol, Vol.16:225-229, 2004

2) 板澤朋子，内野三菜子，今堇倍敏行，染谷正則，尾藤誠司
第1回～第8回「医学生のための放射線治療セミナー」参加者進路追跡調査
J Jpn Soc Ther Radiol Oncol, Vol.17:215-219, 2006

3) 板澤朋子，内野三菜子，今堇倍敏行，染谷正則，尾藤誠司
JASTRO平成16･17年度研究調査報告　卒前におけるセミナー形式専門的教育がキャリアパスに与える影響の検討；参加者の視点でみたJASTRO学生セミナー
J Jpn Soc Ther Radiol Oncol, Vol.19:127-133, 2007



第10回医学生研修医セミナー

医療法人社団高邦会 高木病院／久留米大学名誉教授　早渕 尚文

2004年JASTRO医学生セミナーの第10回を久留米大学でお世話することになったが、実はこの会は大きな曲がり角に立っていた。折り悪しく初期臨床研修制度が始まって研修医として2年間勤めた後、進路を決めることになった最初の年であったのである。このため、学生が参加してくれないのではないか不安が大きかった。そこで、学生だけでなく研修医にも対象を広げることで乗り切ってみてはどうかということになった。

学生と研修医が将来自分もやってみたいと思えるように放射線治療の面白さをアピールをしてもらえる講師陣の充実が第一であるが、阿部光幸、井上俊彦両先生などの大御所の他、すばらしい先生方に遠路を久留米までおいでいただき熱弁を振るっていただいた。翌日は放射線治療計画の実習を行ったが、当院の放射線部の技師諸氏が喜んで協力してくれた。さらにレクレーションも重要と考えた。福岡県南部（筑後）地域の観光地として柳川の川下りと原鶴温泉の鵜飼いがある。鵜飼いは岐阜県の長良川が有名であるが、長良川では観光客は屋形船に乗って鵜飼いの舟とすれ違いざまに遠くから一瞬、見るだけである。一方原鶴温泉の鵜飼いは鵜匠が鵜を操る舟と屋形船が一緒に川を下り鵜匠の一挙手一投足まで間近で見ることができる点で全国でも珍しい。このような点を考慮して迷いなく鵜飼いを選んだ。当日は雨であったが、夕暮れと共に晴れてきた。かがり火（実際は明るい電灯）に集まる鮎を数羽以上の鵜が潜って捕獲するのを鵜匠が見事に操る様を堪能するまで見ることができた。久留米大学のスタッフは全員緑のポロシャツを着用して歓迎の意を示し、夜の懇親会でも折角九州までおいでいただいたということで、九州の酒（焼酎）を教室員と同門の先生方に用意してもらった。なかなか手に入りにくい森伊蔵や魔王などである。お陰で夜遅くまで熱い議論が続いて大いに盛り上がった。教室の先生方と医局秘書の方々が準備と運営に大いにがんばってくれた。しかし、参加者にいかに満足してもらえるかを考えてこのセミナーを企画し現場を取り仕切り、無事成功裏に終らせることができたのはまぎれもなく淡河恵津世先生（現：久留米大学教授）の力である。JASTROの学生支援グループの先生方にも熱心にご指導いただいた。2004年のセミナー参加者は医学生と初期研修医合わせて10名（他3名）であったが、後から聞いた話では次年度以降に全国の施設で放射線治療の実践と普及に尽力していただいている先生がこの中からなんと7名にのぼり、これまでのセミナーでもっとも専門医率が高いそうである。

2023年のJASTROの会員が4448人（うち正会員2316人）とあるが、2004年当時は会員2386人（正会員1732人）であるからJASTROは大きく発展している。このセミナーもがんばって続けていることが多少貢献しているかもしれない。その中で初期臨床研修制度の初年度とぶつかり、存続か中止かを迷った当時、とにかく頑張って続けなさいと阿部光幸先生に叱咤激励のお言葉をいただいたのをなつかしく思い出す。





第11回医学生・研修医のための放射線治療セミナーを担当させていただいて

日高病院／奈良県立医科大学 放射線腫瘍医学講座　長谷川 正俊

第11回医学生・研修医のための放射線治療セミナーは、2005年8月5日～7日、藤原宮跡、橿原神宮等で有名な奈良県橿原市において、奈良県立医科大学放射線腫瘍医学講座が担当させていただきました。世話人は大石元先生（名誉教授）、スタッフは教室員でしたが、JASTRO関係の多くの先生方、関連企業、関連病院、他、多くの皆様にご協力いただきました。私自身は、奈良医大に着任して間もない頃でしたが、大石先生、玉本先生を始めとする教室員と共に、本セミナーおよび放射線腫瘍学夏季セミナー（当時は同時開催）を何とか無事に開催できたと記憶しています。関係者の皆様、ご協力本当にありがとうございました。当時は、学生・研修医の参加者が減少傾向で、セミナー継続が危ぶまれていましたが、幸い、（30名の募集に対して）医学生28名、研修医8名、計36名の参加がありました。

初日は、放射線腫瘍学のレジェンド、大御所の先生方に、放射線腫瘍学の総論（放射線治療の進歩と展望、小線源治療等）や放射線生物学についてご講演いただきました。座長は橋本省三先生（慶大）で、阿部光幸先生（京大）、井上俊彦先生（阪大）、大西武雄先生（奈良医大）、新部英男先生（群大）の魅力的な講義は参加者にとって非常にインパクトがあったようです。

講義の後は、中大兄皇子（後の天智天皇）と中臣鎌子（後の藤原鎌足）が“大化の改新”に関する談合（密談？）を行ったことで有名な談山神社に隣接するホテルで、名物料理「義経鍋」を味わいながら、大御所の先生方、JASTROの理事、教育委員会委員、他の先生方、スタッフが、学生、研修医と、放射線腫瘍学について熱く語り合いました。お酒も入って、昼間の講義以上に盛り上がり、率直な質疑や議論が深夜まで続き、癌治療の“平成の改新？”について（密談ではなく）討論された参加者もいたようです。（当時は、まだ3D-CRTが主流で、IMRTはやっと普及し始めた頃でした。）

2日目は、本セミナーと夏季セミナーの両方の参加者を対象として、細胞死（大西武雄）、温熱療法（櫻井英幸）、物理（内山幸男）、粒子線（香川一史）、定位照射（永田靖）、QOL（高橋健夫）、頭頸部癌（井上武宏）、肺癌（中山優子）、子宮頸癌（茶谷正史）等の講義が行われました（敬称略）。学生には少し難しい内容も含まれていましたが、最前線で活躍されている先生方の魅力的な講義に加えて、若手医師と講師の質疑応答も多く、一日、熱心に聞き入っていました。

講義の後は、橿原神宮前のホテルで合同懇親会を開催しましたが、八雲琴の優雅な調べで始まり、ご挨拶、ご当地クイズ、歓談等で大盛況となり、賑やかな宴が夜遅くまで続き、2日連続で寝不足になった学生もいたようです。

最終日は、放射線治療計画の実習でしたが、参加者が定員オーバーとなっていたために、2班に分けて、実習と観光を交互に行わせていただきました。実習中の参加者の表情や目が生き生きとしていたのが非常に印象的で、将来の放射線腫瘍学を牽引してくれる放射線腫瘍医が何人も誕生することが期待されました。

今回、この原稿を書かせていただくにあたり、21年前の本セミナー参加者の12名が放射線治療専門医になったと伺いました。全国の皆様のご努力、ご協力で、志ある医学生、研修医が多数参加していたということかもしれませんが、奈良での開催が放射線腫瘍医の育成に多少でもお役に立てたのであれば幸いです。



第12回医学生・研修医のための放射線治療セミナー回顧

東京科学大学　吉村 亮一

私は教育に対する想いが薄い。教えることが苦手だ。

2006年（平成18年）は、大学を卒業し放射線科に入局して11年を経過したタイミングで、大学の診療において年齢的に教授の次は私という、今も昔もそう変わりない人手不足が蔓延している状況のなか、渋谷 均教授（当時）が第8回放射線腫瘍学夏季セミナーと抱き合わせで第12回医学生・研修医のための放射線治療セミナーを引き受けてきた。

我々にどうしろと…

そんな私の前に、中村聡明、内野三菜子、板澤朋子という放射線腫瘍医同年代で、キラキラ輝きながら教育論を展開する輩が現れた。熱海で開催した第12回医学生・研修医のための放射線治療セミナーは彼らが作った若手教育グループNExTが誰の指図をうけることなく、練りに練って創造した奇跡のような3日間だった。

初日（8月4日）学生・研修医の参加者41名

午後集合。阿部光幸先生（京都大学）、井上俊彦先生（大阪大学）、萬 篤憲先生（東京医療センター）、大屋夏生先生（熊本大学）の講演が、参加者を放射線治療の世界に誘導する。

夜の懇親会は学生・研修医、そしてNExTメンバー、大御所放射線腫瘍医との距離を一気に縮めた。





2日目（8月5日）グループに分かれてPBL実習

乳癌、食道癌症例を対象に臨床情報、検査所見、病理像を見て病態を把握し、その患者に対する治療方針を議論。そしてその結果から導きだされた放射線治療を実施するために、PCに向かって議論を続けながら最適解を求め一連の治療計置を行った。この日のために作成したオリジナルTシャツを着たNExTメンバーがチューターとして参加者をサポートした。最後はグループでの治療計画を発表。受講生間での質疑応答。そして司会の妙。

2日目夜の懇親会は同時開催の第8回放射線腫瘍学夏季セミナー参加者との合同懇親会。

そして偶然、熱海海上花火大会開催日と重なり、ホテルから観覧。

NExTメンバーによるチューター反省会は終わる気配がない。








3日目（8月6日）最終日は総括

参加者もNExTメンバーもぐったり満足。修了証を渡され全員で記念撮影。このあと陽子線治療装置を有する静岡がんセンター見学へ向かい、現地解散となった。





第13回医学生・研修医のための放射線治療セミナー

熊本大学 放射線治療医学講座　大屋 夏生

2007年の8月3日から5日にかけて、熊本で医学生・研修医のための放射線治療セミナーを開催しました。熊本大学に着任してから3年弱、夏季セミナーと合同開催で参加者300名という大規模な集会の開催準備は初体験だったので、それだけでもなかなかのプレッシャーでした。加えて、前夜の8月2日の18時に、945 hPaの台風5号がお隣の宮崎県日向市に上陸、ドキドキして当日の朝を迎えたことを憶えています。

セミナー本番の3日間は、当時若手の放射線腫瘍医の皆さんが、チューターとして、講師として、宴会要員として、一人で何役もこなしてくださり、セミナー参加の学生、研修医もそれに呼応するように、大いに盛り上がりました。私自身は、その熱気に圧倒されて、なんだかボーっとしているうちに過ぎ去ったような気がします。そういえば、2日目の朝は寝不足と二日酔いで寝過ごして、会場にダッシュしたのですが、9時の開会の挨拶にギリギリ間に合わなかったことを思い出しました。すみませんでした。

熊本のセミナー参加者は33名で、そのうち17名が放射線治療専門医になってくれたとのこと、嬉しい限りです。あの時を振り返ると、参加者の心を動かしたのは、知識や技術の伝達だけではなく、顔の見える先輩達との出会いだったと思います。それから19年、あの頃の学生や研修医が各地の現場で放射線治療を支え、次の世代を育てる立場（どころか、中堅から重鎮として、領域全体を牽引する立場）にあることを思うと、時の流れを実感するとともに、世代を超えた出会いの重みを改めて感じます。

私自身も、このセミナー開催を契機に、卒前卒後教育の重要性を改めて認識できたような気がします。寄稿の機会をいただけたことに感謝します。







第14回JASTRO医学生・研修医のための放射線治療セミナーについて

宇治徳洲会病院 放射線治療科　平岡 真寛

2008年8月1日からの3日間、第14回JASTRO医学生・研修医のための放射線治療セミナーを当番世話人（その当時は京都大学医学研究科放射線腫瘍学・画像応用治療学）として開催いたしました。このセミナーは例年盛夏の折に開催されるため、今回は京都の酷暑を避け、琵琶湖畔の滋賀県立県民交流センター「ピアザ淡海」に会場を設定しました。

本セミナーは、講義と実践的な治療計画演習を合宿形式で行う伝統ある試みです。年々高まる参加希望に対し、十分な受入れ態勢を整えることが積年の課題でしたが、今回は企業各位のご支援も得て、定員を40名へと大幅に拡充することができました。募集を増やしたにもかかわらず、非常に多くの応募があり20余名の方には来年の応募をお願いいたしました。お断りせざるをえない状況は非常に残念でしたが、放射線治療に対する関心の高まりに喜びも感じました。

セミナーの伝統的なスローガンである「良く学び、良く遊べ」を具現化すべく、親睦行事にも趣向を凝らしました。その目玉として、琵琶湖に2艇のクルーザーを配した湖上懇親会を企画いたしました。幸い天候にも恵まれ、参加者の皆様には湖上の涼風とともに、打ち上げ花火や「びわこ花噴水」のライトアップを楽しんでいただくことができました。

また、意外な好評を博したのが、スタッフ･チューター用に新調したユニフォームです。例年のTシャツからポロシャツへと衣装を改め、教室員が案を出し合ったオリジナルロゴを配したところ、講師や教育委員の諸先生方からも譲ってほしいとの要望が相次ぐほどでした。

教室員が一丸となって運営にあたった本セミナーは、開催者にも深く記憶に刻まれるものとなりました。開催にご尽力いただいたセミナー講師、教室員、技師の皆様、そして何よりセミナーを大いに盛り上げてくださいました「セミナー参加者」の皆様に、心より深く感謝申し上げます。



治療計画の実習風景。平岡はオリジナルポロシャツ着用。西尾、根本先生の顔も。



湖上懇親会：カントリーミュージックとともに2艇に分かれて乗船中。左端人物のポロシャツバックプリントがオリジナルロゴ。



第15回医学生・研修医のための放射線治療セミナー 世話人として

友愛記念病院／自治医科大学　仲澤 聖則

思い出の夏、という懐かしさまでは至りませんが、セミナーを同時開催させていただいた2009年の夏は、多忙でも非常に涼しかった事を覚えています。場所はお台場のTFTホール。2003年に癌研病院の山下　孝先生がJASTRO学術大会を主催された時の事務方としてなじみがあったこと、参加者に新装なったがん研有明病院見学の便宜を図っていただいたこと、栃木県よりも交通至便であったことなどを勘案して決めた会場でした。

基本講演として、阿部光幸先生の「放射線治療の概論」、内田伸恵先生の「放射線腫瘍医の道と家庭との両立」、山下　孝先生の「放射線腫瘍医のたどった道：多様性と今後の提言」などは、ビデオに撮ってあれば現在でも観たいような内容でした。その後は、NExT若手による熱のこもった実習が行われました。懇親会はレストラン「中村孝明」有明店で開かれ、有名なオーナー飛び入り参加もあって、大いに盛り上がりました。

会員向けの夏季セミナーは、基礎、update、必須/topicsの3コースとして工夫しました。8月1日夜は東京湾の屋形船2艘を貸し切り、各部署に理事の先生方を均等に配置しました。興味ある臓器の参加者が集まって、若手の医師がベテランを囲み質問や話題を重ねて、楽しく酒を飲むというエクスパートトークの形式としました。幸い天気も波も穏やかで、盛況な湾内観光ができました。

JASTRO会員のための夏季セミナーと医学生・研修医のための放射線治療セミナー同時開催は2009年が最後となり、転換点となったと考えられます。放射線治療専攻を視野に入れた若手医師や医学生を、理事や教育委員などのベテラン医師が親身に囲い込んで、会員を増やして行こうという雰囲気が昔はあったような気がします。2010年から、学会法人化、企業協賛の限界や時代の要請によって、医学生・研修医のためのセミナーは夏季セミナーから完全に分離され、関東/関西の2か所に別れ、指導者はやる気に満ちたNExTの若手医師のみに任されるシステムとなりました。おかげで、教育委員会の負担がだいぶ軽減されたと感じていました。

学会事務局にお願いして、2009年度までの前後15年間のJASTROへの医師入会数を調べていただきました。それによると、同時開催された15年間（1995－2009年度）は1359人、異時開催開始よりの15年間（2010－2024年度）は1326人であり、ほとんど差が生じていないことが判明しました。以上より、本セミナーは時代の変遷を受け入れつつ、有望な若手医師を確保するために、やはり続けて行く価値があるものと考えられます。

今後は、秋の学術大会において新年度の入会者を優遇し、ベテラン会員との交流を通じて、未来に向けて明るく励ます機会を増やしてくれることを、JASTROに期待しております。





放射線治療セミナーの思い出

名古屋大学 医学部附属病院　石原 俊一

JASTRO医学生・研修医のための放射線治療セミナー、30周年おめでとうございます。1995年から開催されているということであり、1994年卒の私の医師歴とほぼ同じということになります。

正確な時期は覚えていませんが、私とこのセミナーとの出会いは代議員になり、がん放射線治療推進委員会の委員になったころからです。このセミナーのことは名前くらいしか知らない放射線治療医でしたが、スタッフとして参加してみると、スタッフやチューターの熱量が非常に高く、圧倒されました。セミナーが終了し、夜の懇親会が始まるときの「これからが本番です」という中村聡明先生の挨拶が印象に残っています。また、私が医師になったころ京都大学を退官された阿部光幸先生と唯一お話ししたのもこのセミナーでした。

2015年、2016年には大阪会場の統括責任者をやらせていただきました。ポスターのデザインやセミナーのスローガンを決めるなど、セミナー準備の一端に触れることができました。セミナー準備の実務はセミナー･レジナビ実行小委員長の中村聡明先生、実行責任者の相部則博先生（2015年）、堤真一先生（2016年）がほとんどやってくれました。2015年は母がリンパ脈管筋腫症のため在宅酸素をしながら実家で療養しており、90歳を超えた祖母が世話をしていました。実家は私の自宅からは車で1時間ほどの距離でしたので、近くに住む親戚に協力してもらい、何とか生活が成り立つという状況でした。このため、セミナーの仕事はほとんどできず、特に、相部先生には多くの御迷惑をおかけしました。統括責任者であるにもかかわらず、懇親会に参加しなかったのは2015年の私くらいではないでしょうか。

2016年には、がん放射線治療推進委員会委員長の永田靖先生と私で30分ずつくらいの講演をさせていただきました。永田先生は総論を私が各論の話をしたと思います。私の講演内容は、「著効症例の供覧」と「放射線治療と手術の比較で放射線治療の方がいいという論文の紹介」です。自分では「洗脳スライド」と呼んでいましたが、洗脳が成功し、放射線治療医になった方が何人かいたのであれば、うれしく思います。

このセミナーは放射線治療医への勧誘に関して、大きな役割を果たしてきたことは明らかです。他に、全国の放射線治療医と知り合いになり、放射線治療医同士の横のつながりを作るという効果もあります。私にはこのセミナーがきっかけで知り合いになり、その後、個人的な飲み会をするようになった先生が複数人いらっしゃいます。

このセミナーが今後も継続していくことを期待しておりますが、放射線治療の魅力が医学生・研修医に十分に伝わって、放射線治療希望の専攻医が十分に集まり、このセミナーが必要でなくなることが、真のゴールかもしれません。

NExT の歩みを振り返る
——NExT代表経験者より

新潟県厚生連 長岡中央綜合病院　阿部 英輔
武蔵野赤十字病院　戸田 一真
京都府立医科大学附属病院　相部 則博

本稿では、「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」（以下、セミナー）を中心としたNExTの活動について、関係者の皆様への感謝の意と、ささやかな感慨を交えつつ振り返ります。

NExT（New Education × Training）は、2006年から2023年まで活動したJASTRO非公式の若手医師グループであり、セミナー参加者のキャリア追跡調査を契機として発足しました。発足の経緯については板澤先生・今葷倍先生のご記載をご参照ください。歴代代表は中村聡明先生、阿部英輔、玉置幸久先生、戸田一真、相部則博で、メンバーは全国に広がり、最大で約100名規模にまで発展しました。時に厳しいご批判をいただくこともありましたが、NExTは未来の放射線腫瘍医を育むための学びの場を創出することを主たる使命とし、セミナー内のRTPSを用いた治療計画実習の支援を軸に、多岐にわたる活動を展開してきました。

2009年まではセミナーは「放射線腫瘍学夏季セミナー」と一体であり、主管大学制で開催されていました。NExTは非公式ながらも準公式的な立場で運営に関わらせていただきました。JASTRO事務局ならびに主管大学の皆様にはこの場を借りて心より御礼申し上げます。当時は開催地や運営体制が毎年異なっていたため、RTPSの準備や参加者対応、当日の運営に至るまでその都度多くの調整が必要であり、試行錯誤の連続でした。また、実習中に電源容量不足によりRTPSが停止するトラブルも経験しました。その後しばらくの間、「電源大丈夫？」が合言葉のように交わされていたことも今では懐かしく思い出されます。

当初、治療計画実習のノウハウは十分なものとは言えず毎年手探りの状態で進めていました。前立腺・頭頸部・肺など班ごとに異なる症例を扱っていたため、臓器別の運営体制も必要であり、準備の負担は大きいものでした。一方で、この時期がNExTの活動が最も活発であったとも言え、NExT代表の選出は臓器別グループのリーダー・サブリーダーからの互選とするなど、透明性と世代交代を意識した運営方針が形作られました。オンライン環境が十分に整っていなかった当時はSNSやメールを通じた密な議論に加え、対面での意見交換も重ねていました。セミナーが近づくとグループ専用SNS「STEP」への書き込みやメールが頻繁に行き交い、学会や出張の機会に合わせて議論を重ねていたことを今でも懐かしく思い出します。多くの議論が交わされた後の打ち上げの場で「この放射線腫瘍医の喜び・楽しさを参加者に伝えたい」と熱く語り合った事は強く記憶に残っています。こうした思いが参加者にも伝わっていたのか、セミナー参加者が後にチューターとして戻ってくることも多くありました。そのたびにNExTの活動が次の世代へとつながっていることを実感し、放射線腫瘍医の育成にわずかながら貢献できたと感じています。

実習形式は参加者数名に対してチューター1～2名が指導する小グループ制として確立されていましたが、チューターの負担、実習の進行速度や参加者の満足度のばらつきといった課題もありました。これに対し、症例の共通化や継続利用、オンラインRTPSを用いたチューター向けの事前学習の導入など、標準化・効率化が段階的に進められていきました。また、外照射に加えて小線源治療のハンズオン実習も導入され、教育内容の幅が広がりました。小線源治療実習の整備には神沼拓也先生をはじめとする群馬大学関連のメンバーの多大なご尽力がありま



レジナビ東京出展（2016年）


セミナー懇親会（2018年）

した。

配布資料についてもTNM分類の更新や新たなエビデンスを反映しながら改訂が重ねられ、教育的価値の高い内容へと発展していきました。医学生と研修医が混在する参加者にとって、過不足のないレベルに整えることは容易ではありませんでしたが、その分完成した実習資料はメンバー自身にとってもさまざまな場面で活用できるものとなりました。こうした蓄積はコロナ禍におけるオンラインセミナー開催にも間接的に寄与したと感じています。

2010年以降、セミナーは放射線腫瘍学夏季セミナーから分離独立し、大学主管からJASTRO小委員会の管轄へと移行しました。これに伴い開催も年1回から年2回（関西と関東）へと拡充されました。当初はNExTメンバーが運営の中心を担っていましたが、次第に資料やノウハウが小委員会へ集約され、セミナー運営は徐々に安定していきました。また、RTPSベンダーのトレーニング施設を利用させていただくとともに会場の固定化が進んだことで、かつて見られたような設備や機器に関するトラブルはほとんど発生しなくなりました。

セミナー以外の活動としては、「放射線治療のABC」と題した教育講演が挙げられます。これは初学者向けの教育と若手演者の育成を目的としたものであり、現在の教育講演体系の基盤の一つとなっていると考えています。また、NExT内で治療計画ハンズオンを含むグループ内の勉強会も開催され、実践的な学習機会の創出にも寄与しました。

その他、レジナビフェアへのJASTROブース出展もサポートしていました。医学生・研修医へのビラ配りによるセミナーの周知が目的でしたが、学会のレジナビ出展はめずらしかったようで、出展している他施設の医師がブースを訪れて話し込んでいく姿もときおり見られました。レジナビへの出展は主に手島昭樹先生にご尽力いただき、数年前までセミナーの日程はレジナビに合わせて設定されていました。

NExTは懇親も大切にし、飲み会を通じた交流や意見交換を活発に行っていました。学会やセミナーに合わせたこうした集まりはいずれも良い思い出で、とりわけセミナー後の懇親会は毎回盛況で強く印象に残っています。

その後、セミナー運営体制の確立に伴いNExTの役割は徐々に縮小していきました。これにコロナ禍も重なり、2023年1月をもってNExTは十数年にわたる活動に一区切りをつけました。改めて振り返ると、セミナーやさまざまなイベントを共に過ごした時間は、まさに*teaching is learning*という言葉の通り私たち自身の成長につながる貴重な経験でした。また、連日の準備を経て迎えるセミナーは合宿のような雰囲気があり、医局や施設の枠を超えて長く付き合える先輩・友人・仲間と出会うことができました。中には人生の伴侶を見つけたメンバーもいます。NExTへの関わりの大小にかかわらず、すべてのメンバーにとっても同様に得るものの多い時間であったなら幸いです。

最後に、本セミナーが今後も学びと成長の場として発展し続けることを願っております。

医学生・研修医のための放射線治療セミナー

日本放射線腫瘍学会 第30回学術大会（2017年大阪）・第32回学術大会（2019年名古屋）発表スライドより引用

セミナーの歴史

1995年
「医学生のための放射線治療セミナー」開始
2004年
「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」へ
2006年
NExT*創立、セミナーサポート開始
2010年
世話人制廃止
“JASTROがん放射線治療推進委員会”内の
“セミナー・レジナビ実行小委員会”による運営へ

* NExT ; New Education x Training

セミナーは，放射線腫瘍医増加に一定の影響を及ぼしたことが示唆されている*1,2

*1 板澤朋子，内野三菜子，今重倍敏行，染谷正則，尾藤誠司
JASTRO平成16・17年度研究調査報告：卒前におけるセミナー形式専門的教育がキャリアパスに与える影響の検討；参加者の視点でみたJASTRO学生セミナー
日放腫会誌19：127-133，2007.
*2 Yukihisa Tamaki, Tomoko Itazawa, Tomoyuki Okabe, Kazuma Toda, Eisuke Abe, Satoaki Nakamura, Taisuke Inomata
Long-term results of radiation oncology seminar for medical students and residents held between 1995 and 2011: career paths of the participants.
Jpn J Radiol (31): 755-759, 2013

セミナーの時代背景別分類

第1期：医学生のみ（1995～2003年）
世話人制
主催：放射線治療セミナー委員会（～1999年）
JASTRO教育委員会（2000年～）

第2期：医学生＋初期研修医（2004～2009年）
世話人制
主催：JASTRO教育委員会

第3期：医学生＋初期研修医（2010年～現在）
主　催：JASTROがん放射線治療推進委員会
事務局：医学生・研修医セミナー小委員会

目　的

キャリアパス調査を行うことにより、

- ✓ セミナーの成果を確認する.
- ✓ JASTRO会員へ情報提供を行う.
- ✓ 放射線腫瘍医増加に関するセミナーの寄与を検討する.

対象・方法

第1回～29回セミナー（1995～2016年）参加者のうち，参加時点で医学生または前期研修医であった計755人（のべ人数777人）.

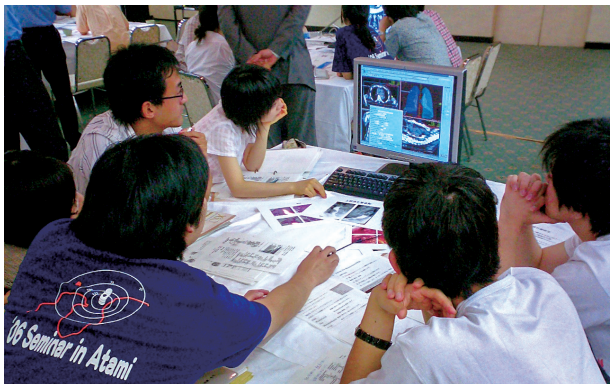
2019年10月時点の
JASTRO入会率・治療専門医率を算出した.

結　果

JASTRO入会数　（入会率）
258/755人 (34.2%)

うち治療専門医数（専門医率）
174/258人 (67.4%)

＊総参加者の23.0%が治療専門医



セミナー実習風景（2006年）


セミナー実習風景（2012年）

参加者のキャリアパス・発表スライド集

開催回別JASTRO入会率・専門医率 ～第1期・第2期～

開催回	開催年	世話人	事務局	参加数	JASTRO入会数	JASTRO入会率	治療専門医数	専門医率
1	1995	伊津野 格	信州大学	25	3	12.0	3	100
2	1996	伊津野 格	信州大学	20	1	5.0	1	100
3	1997	新部 英男	群馬大学	33	12	36.4	11	91.7
4	1998	酒井 邦夫	新潟大学	21	7	33.3	7	100
5	1999	増田 康治	九州大学	28	5	17.9	5	100
6	2000	山田 章吾	東北大学	54	4	7.4	4	100
7	2001	晴山 雅人	札幌医科大学	35	7	20.0	6	85.7
8	2002	井上 俊彦	大阪大学	18	5	27.8	4	80.0
9	2003	早川 和重	北里大学	10	2	20.0	2	100
10	2004	早渕 尚文	久留米大学	10	7	70.0	7	100
11	2005	大石 元	奈良県立医科大学	35	12	34.3	12	100
12	2006	渋谷 均	東京医科歯科大学	35	12	34.3	11	91.7
13	2007	大屋 夏生	熊本大学	33	17	51.5	16	94.1
14	2008	平岡 眞寛	京都大学	43	21	48.8	19	90.5
15	2009	仲澤 聖則	自治医科大学	45	17	37.8	16	94.1

開催回別JASTRO入会率・専門医率 ～第3期～

開催回	開催年	推進委員会委員長	小委員会委員長	統括責任者	参加数	JASTRO入会数	JASTRO入会率	治療専門医数	専門医率
16	2010	西村 恭昌	西村 恭昌	内田 伸恵	22	8	36.4	6	75.0
17	2010	西村 恭昌	西村 恭昌	唐澤 克之	30	20	66.7	19	95.0
18	2011	西村 恭昌	中村 聡明	内田 伸恵	23	11	47.8	8	72.7
19	2011	西村 恭昌	西村 恭昌	仲澤 聖則	23	13	56.5	12	92.3
20	2012	西村 恭昌	内田 伸恵	内田 伸恵	22	11	50.0	4	36.4
21	2012	西村 恭昌	内田 伸恵	仲澤 聖則	21	10	47.6	7	70.0
22	2013	笹井 啓資	内田 伸恵	内田 伸恵	24	14	58.3	6	42.9
23	2013	笹井 啓資	内田 伸恵	中山 優子	21	8	38.1	1	12.5
24	2014	笹井 啓資	内田 伸恵	内田 伸恵	19	5	26.3	0	0
25	2014	笹井 啓資	内田 伸恵	中山 優子	24	12	50.0	0	0
26	2015	永田 靖	中村 聡明	石原 俊一	25	8	32.0	0	0
27	2015	永田 靖	中村 聡明	若月 優	26	11	42.3	0	0
28	2016	永田 靖	中村 聡明	石原 俊一	25	7	28.0	0	0
29	2016	永田 靖	中村 聡明	若月 優	27	10	37.0	0	0

時代背景別 JASTRO入会率

	対象数（人）	入会数（人）	入会率（%）
第1期	244	46	18.9
第2期	200	86	43.0
第3期	311	126	40.5
計	755	258	34.2

時代背景別　治療専門医率

	入会数（人）	専門医数（人）	専門医率（%）
第1期	46	43	91.5
第2期	86	78	90.7
第3期	126	53	42.1
計	258	174	67.4

＊第3期は調査時点でまだ初期研修医である者が多いため、第3期が第2期と比して専門医率が低いとは言えない。

進路選択状況

専攻科	人数（人）	総数に占める割合（%）
放射線治療	252	33.4
放射線診断	109	14.4
他科・不明	394	52.2
計	755	

＊JASTRO入会者255名のうち、放射線科専門医を診断で取得した3名は診断医として算出

結　語

セミナー参加者のうち

およそ3人に1人がJASTRO入会

うち約９割が治療専門医



セミナー実習風景（2017年）



腔内照射実習風景（2017年）

JASTRO医学生・研修医のための放射線治療セミナーの今後への期待

量子科学技術研究開発機構 QST病院　若月　優

この度は、「JASTRO医学生・研修医のための放射線治療セミナー」30周年、誠におめでとうございます。私自身も元チューターの一人として、わずかではありますが本セミナーに貢献できたことを大変うれしく思っております。

さて、今回板澤先生より寄稿のご依頼をいただき、何を書こうか悩んでおりました。板澤先生からは、私の若かりしチューター時代のエピソードとして、「乳がん術後海老反り照射」の話などを提案いただきましたが、最近はすっかり真面目なキャラクターを演じておりますので今回は遠慮させていただき、「今後への期待」という題で寄稿させていただきます。

私がこれまでに感じてきた本セミナーの最大の意義は、「医学生・研修医のため」と銘打ちながらも、「若手放射線治療医」の横のつながりを醸成してきた点にあると考えています。大学や医局、地域の垣根を越えて、同世代の熱意ある仲間と出会えたことは、私にとって大きな財産となっています。

一方で、本セミナーは「医学生・研修医」を放射線治療医へと導くことを主目的としてきましたが、その効果についての十分な分析は、私の知る限り必ずしも行われてこなかったように感じます。私は群馬大学在籍時に約20名（本人による独自調査）を放射線治療医の道へ導き、また自治医科大学においても、地域医療従事を前提とした特殊な環境下にもかかわらず、4年間で3名の研修医が放射線治療医となりました。このような実績から、自他ともに認める「放射線治療医勧誘のスペシャリスト」だと自負しております。

その経験の中で常に感じてきた疑問が、「本セミナーは本当に医学生・研修医を放射線治療医へ導くうえで有効なのか」という点です。私は、医学生・研修医の勧誘には以下の3つのステージがあると考えています。

①放射線治療に全く興味のない層に興味を持たせるステージ

②放射線治療に興味はあるが、他科とも迷っている層を導くステージ

③放射線治療に強い関心があり、入局の背中を押すステージ

本セミナーの性質上、①のステージの医学生・研修医が参加することは少なく、この層へのアプローチは各大学での取り組みや別の方策を考える必要があるでしょう。本セミナーに最も期待される役割は、②のステージ、すなわち放射線治療に関心を持ちつつ他科と迷っている層を放射線治療医へ導くことだと思われます。

しかし、参加者アンケートなどを見る限り、実際の参加者の多くは③のステージにあり、②のステージの参加者は一部にとどまっている印象です。ぜひセミナーのOBや委員会の先生方には、「参加者何人中何人が放射線治療医になったか」といった③の参加者の人数に左右される評価だけでなく、②のステージの参加者がどれほど放射線治療医となったのか、また、どのような関わりや会話がその意思決定に影響したのかを分析していただきたいと考えます。その成果を、今後のセミナー運営や参加者選抜に生かしていただければと期待しております。

最終的には放射線治療医の裾野が広がり、将来の放射線治療のさらなる普及につながるセミナーへと発展していくことを願っています。

本セミナーは、まだ「本当の意味での役割」を十分に果たしきれていない部分もあるかもしれません。今後のさらなる発展により、日本の放射線治療界にとって不可欠な存在へと進化していくことを、心より期待しております。

‘良縁’に恵まれまして

新潟市民病院　金本 彩恵

「気になるし、行ってみよ」

医学部6年生の時にふと思い立ち久留米まで行ったことが、振り返れば仕事人生の始まりでした。第10回セミナーは、初期研修医制度が始まった年で、受講者に医学物理士の方もいらっしゃり、物理士という職業を初めて知ったことを覚えています。

その後は、卒業試験・国家試験、初期研修に追われ、気づいたら医師2年目目前。後期研修を考える段階で再度気になったのが、放射線治療でした。ただ、当時の研修先には放射線治療の常勤医がおらず、思い切ってJASTROにメールを送ったところ、当時理事の晴山雅人先生より光栄にもお返事を頂いたのが2006年2月。セミナー参加をご提案いただき、第12回セミナーに2回目の参加となりました。そのセミナーにて全国の先生方とお話する機会に恵まれ、「プライベートな時間も捧げることが多い医師という仕事の中で、何であれば一生向き合えるか」と自問しました。そして、私にとってはがん治療かなという思いに至り、「これも何かの縁」と放射線腫瘍医を目指す決心をしました。その時にチューターの先生から頂いたメッセージカードは、今でも大切に残してあります。

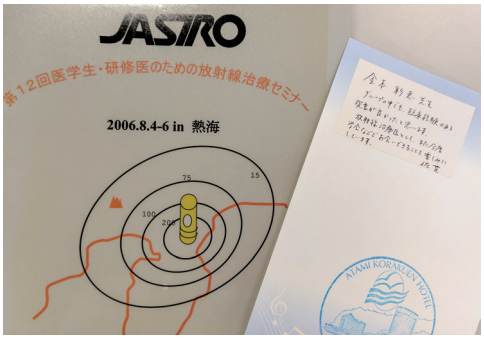
そして、後期研修医にもかかわらず、今度はセミナーにチューターとして関わり始め、そこから5年ほど務めました。始めたきっかけは、当時のチューターの先生に誘われたからです。板澤朋子先生、2007年8月に先生から頂いたメールが始まりです。チューター仕事の保管資料を探すと、当時のメールやJRS総会での打ち合わせ議事録が出てきました。その資料が膨大な量であることは言うまでもありません。よく1回で終わらせずに続けたと思いますが、それは、ひとえに中村聡明先生始め全国の先生方と話せることが楽しく、かつ精進できる機会でもあったからです。

妊娠を境にチューター活動からは離れましたが、‘縁’というのは不思議なもので、今度はセミナーでお世話になった先生方と、別のお仕事をご一緒させて頂く機会に恵まれました。その日本乳癌学会診療ガイドライン放射線療法小委員会で、「こんなところで一緒に仕事をすることになるとはね」とお話下さった佐貫直子先生、第12回セミナーでメッセージカードを下さったのは先生です。

人生そろそろ折り返し。このセミナーにて公私ともに‘良縁’に恵まれ‘今を生きている’ことに感謝しつつ、また諸先生方に会えることを楽しみに今後も精進してまいります。



第10回セミナーにて シェルを作成



第12回セミナー資料と頂いたメッセージカード

JASTRO医学生・研修医セミナー 30周年に寄せて

公益財団法人田附興風会 医学研究所北野病院　中嶋　綾

JASTRO医学生研修医セミナーが30周年を迎えられたとのこと、心よりお祝い申し上げます。

私は大学5回生のとき、久留米で開催された第10回セミナーに参加いたしました。前年の4年生の夏に、大学で基礎・臨床教室に配属するプログラムがあり、「見えないメスでがんを切る」というフレーズに惹かれて放射線治療科を選択したのが本分野との出会いでした。その際にお世話になった今葷倍敏行先生から本セミナーをご紹介いただいたことが、参加のきっかけでした。

セミナーでは、高名な先生方による講義、久留米大学の施設見学や治療計画実習、レクリエーションの鵜飼など、多彩なプログラムに圧倒されました。学生だった私にとって、そのすべてが新鮮であり、放射線治療という分野の奥深さと可能性を肌で感じる貴重な機会となりました。なかでも深く記憶に刻まれているのは、夜の懇親の場です。ベテランから若手の先生までが膝を突き合わせ、お酒を酌み交わしながら語り合い、一線で活躍する先生方の飾らない本音に触れるひとときは、まさに贅沢な時間でした。特に、この分野を支える仲間が不足しており、新しい世代の参画を心から待ち望んでいるという先生方の情熱に触れた経験は、私の進路を決定づける大きな力となりました。

初期研修修了後に放射線治療科へ入局してからは、チューターとしてセミナーに関わる機会をいただきました。さらに2012年および2013年には、大阪開催のセミナーにおいて実行責任者を務めさせていただきました。運営に携わる中で、本セミナーが多くの方々の献身的な支えによって成り立っていることを実感いたしました。

特に治療計画装置を用いた実習の準備においては、全国のNExTメンバーと知恵を絞り内容を検討しました。その際に私たちが強く意識したのは、単なる治療計画装置の操作習得ではなく、「患者さんと向き合う医療」としての本質、そして放射線腫瘍学の面白さや奥行きをいかに伝えるか、ということでした。試行錯誤の連続でしたが、参加者の真剣な眼差し率直な感想に触れるたびに、本セミナーの意義を再認識する機会ともなりました。

振り返ると、本セミナーは単なる知識習得の場にとどまらず、人と人との出会いを通じて価値観や進路に影響を与える、極めて貴重な場であったと感じています。かつて一参加者として受けた刺激が、今の自分の原点の一つになっていることは間違いありません。

30年にわたり多くの放射線腫瘍医を育んできた本セミナーが、今後さらに発展し、より多くの志ある医学生・研修医が本分野に関心を持つ契機となることを心より祈念しております。



2012年大阪セミナー

第10回セミナー（2004年）@久留米に参加して

中頭病院　有賀 拓郎

セミナー30周年および記念誌発刊おめでとうございます。南国放射線治療医の有賀です。

現在は琉球大学を離れ、河島光彦先生とともに沖縄本島中部の中頭（なかがみ）病院というところで日々ドタバタと放射線治療を楽しく行っております。

私がこのセミナーに参加したころはM5でポリクリをしていた時期かと思います。その頃の琉球大学は放射線治療医になるなんて医学生は全くおらず、師匠第一号の戸板先生曰く『砂漠に水をまくような日々』だったそうです。私は前年度の戸板先生の授業で大笑いしたこともあり、楽しそうなので放射線治療をやろうと決めたところでした。

参加に際して一人ではつまらんなと思い、片っ端から同期の女の子に声をかけ美人な同級生を一人お誘いすることができ、ウキウキの気分で那覇空港から福岡に向かった覚えがあります。ただ、あまりにセミナーの内容がインプレッシブだったため同伴した同期とのエピソードなんて一切覚えておりません。残念。

そう！久留米で受けたセミナーの講義実習にいたく感銘を受け、私は治療医になる決心を固めました!!! ……と言えればかっこいいのですが、大変申し訳ないことにほとんど講義や実習の記憶がなく、かろうじてペースメーカーって照射すると壊れるのね！と思ったことくらいしか残っておりません。時代的には国内のIMRT前夜だったと思いますので、非常に熱い講義が繰り広げられていたと思いますが、覚えておらず非常に残念です。セミナーでご講演されましたご先生方にはこの場を借りて深くお詫び申し上げます。ただ、会場の雰囲気が抜群によく、とにかく楽しかったことだけが残っております。

じゃあ何が記憶に残ったのかといえば、まずは夜の筑後川での鵜飼ショーです！屋形船に乗り込んで、宴席を囲みながら鵜飼を眺める光景に『お、大人の社交場に来てしまったぜ…』と身震いしておりました。超貧乏に育ち高校からバイトして自分で学費を払い、大学からは月30日のバイトシフトを組んでいた私にとってそれは異次元の光景でして、治療医になるとこういうお遊びができるのね、と強烈な刷り込み（笑）を受けたことは間違いありません。

そして、間違いなく私が治療医になる意思を固めたのが翌日夜の懇親会です。会の前年に上皇陛下が前立腺癌の手術をされており、その日は放射線治療医として自分ならどうするかを熱く議論していたのを覚えております。当時群馬大学の若手だった若月先生が話題を先導しながら、その場にいた先生方がキャリアの上下関係なく議論していたのを鮮明に覚えております。ポリクリ実習中にはやたらと縦の縛りがきつく、議論するなんて雰囲気のない診療科が多かったので、他科にはない魅力的な景色として記憶されております。

それから無事に放射線科に入局して、同門の玉城稚奈先生から引き継ぐような形で2010年代ごろからこの会にかかわらせてもらうようになり、早10年ほどが経っております。一応後輩の山形先生にバトンをつなぐこともできました。

最後に、今後も本セミナーとJASTROの発展に微力ながら寄与出来るように努力する所存でございます。今後ともよろしくお願いいたします。



JASTRO医学生研修医セミナー 30周年記念誌

香川大学 医学部附属病院　高橋 重雄

貴重な機会を頂戴したため、当時の雰囲気や心に残っていることを物語調で記したい。

この項は、兵庫県出身の香川大学生が医学実習に臨んでいた平成20年頃の話である。彼は大学1年の終わりから、香川県出身の同年代の女性と交際していた。2年の途中からその女性の実家に週5でお世話になり、自身のアパートにはあまり帰らなくなっていた。関西弁で成人までを過ごした彼は、讃岐弁に次第に慣れていった。そして自身の実家に帰るたび、関西弁の強さに疲れていった。研修医になったら関西に戻るつもりであったが、その気持ちは次第に薄れていった。

彼が医学実習Ⅰを受けた当時、病棟にはがん患者さんが多く入院されていた。彼は「がん治療にニーズがある」と感じた。当時はフィルムからPACSへの過渡期で、各科のカンファレンスはシャウカステンの前で行われていた。彼はCTフィルムを見て、グレースケールで表現される身体の情報に惹かれていった。そのニーズと自身の興味を合わせ、5年の冬休みに「放射線治療を志す」旨を自身の両親に告げた。

休み明けに香川に戻った彼は、放射線科の医学実習Ⅰに臨んだ。広島大学から派遣されていた先生（当時・香川大学講師）による放射線治療の実習であった。勢いがあっておもしろそうだと感じた彼は、実習後に一人でその先生を訪ね、「先生はずっと香川におられるのですか？」と質問した。おそらく入局先の候補と考えたのだろう。その先生は大人の事情を言える範囲で彼に伝えながら、作成中の治療計画のメ切が大丈夫なことを確認し、彼に「呑みに行くか？」と声を掛けてくださった。この先生（現・高知大学教授）に「鶏の店」に連れて行ってもらったが、何を話したかは覚えていない。

6年になると選択性の医学実習Ⅱになった。画像を勉強できる放射線科は人気で、1コマ選択できれば御の字であった。幸いにも2コマ確保できた彼は、放射線治療棟でその先生の診療に同席し続けた。ひたすら外来・病棟・治療計画に取り組んでおられたその先生が「JASTROで医学生研修医セミナーがあるけど、行ってみる？」と声を掛けてくださった。放射線治療医志望の彼は、そのお話を喜んでお受けした。

2008年の8月、夏季セミナーと同時に医学生研修医セミナーが滋賀県の琵琶湖畔で開催された。記憶は薄れつつあるが、放射線治療は線量分割を駆使できることを当時・若手のリーダー（現・がん放射線治療推進委員長）から学んだと思う。そしてこのとき教わったであろう計算式は今でも活用している。夏季セミナーと合同のmeet the expert形式のランチョンで、当時・理事の先生（前々・理事長）の食道のセッションを聴講し、放射線治療が根治的な治療方法であることを改めて実感した。懇親会は平成ど真ん中の熱気があり、飲み会好きの彼には刺さったようである。そしてホテルに戻る湖畔の夜道がキレイだったことを、この文章を書くにあたって思い出している。

その後、冒頭の女性と結婚した彼は広島大学に入局した。広島弁に染まるつもりであったが、家庭の都合で1年後に母校に新設された放射線治療科に移籍した。その讃岐の地で内外の刺激を受けながら42歳になった彼は、このセミナーを経て放射線治療医になったことを心から満喫している。

JASTRO医学生研修医セミナー 30周年によせて

旭川医科大学　青木 友希

放射線治療専門医資格を取得して今年で8年目となりました。すべての始まりはこの医学生研修医セミナーだったと言っても過言ではないのかな、と思っています。今年でこのセミナーが30周年ということで、当時のことを振り返ってみました。

初めてこのセミナーに参加したのは研修医1年目の時で、2011年の東京セミナーだったと記憶しています。当時私は放射線科への入局は決めていたものの、診断と治療のどちらに進むか迷っていた頃でした。そんな時上司に勧められるがままにこのセミナーに参加し、あっという間に治療の魅力に取り込まれました。具体的な内容は10年以上の前のことなのでさすがに少し薄れているのですが、治療計画を行った症例は食道癌だったと思います。今思うと結構難関な症例だったような気もしますが、チューターの先生に優しく教えてもらいながら試行錯誤してプランが完成したときの達成感はすごかったです。また、セミナー中および懇親会でたくさんの先生の話を直に聞くことができ、そのどれもが深く心に刻み込まれた結果、気がついたら懇親会の所信表明（?）で治療の道に進むことを宣言していました。そのことを後悔したことは今まで一度もありません。

そんなこんなで治療の道に進むことを決意した後、しばらくはチューターとしてセミナーに関わらせていただきました。教わる側から教える側に変わることで、改めて自分も学ぶことが多い期間だったと思います。また、このセミナーを通じてたくさんの治療医の先生方と繋がりができたことも非常にありがたいことでした。

2018年および2019年には大阪セミナーの実行責任者を担当させていただきました。2018年のセミナーはセミナー数日前に九州などで大雨警報が発表され、交通事情などで急遽当日10名の欠席が出るなどのハプニングもありましたが、なんとか終えることができて安堵した記憶があります。写真はその時の一幕で、各種対応をし終えてほっと一息ついているところです。大変だったこともたくさんありましたが、この経験は確実に今の自分の糧になっています。

2020年以降は自身の出産・育児もあり、徐々にセミナー運営からは遠のきましたが、今も学生・研修医には必ずセミナーの案内をしています。今後、後輩にも運営に携わっていってもらえたらなと密かに画策しています。

こうして振り返ってみると、改めて自分の治療医の道にこのセミナーが必要不可欠であったと強く感じます。今後も50年、100年と長く続いてたくさんの治療医がここから誕生してくれれば良いなと思います。この度は30周年、本当におめでとうございます。今後も益々の発展をお祈り申し上げます。



第32回セミナーにて　大雨警報の対応を終えてほっと一息をつくスタッフ

セミナー30周年に寄せて
―参加者から運営へ、私の10年

京都大学 医学部附属病院　岸　徳子

私が本セミナーに初めて参加したのは、2013年度の大阪会場、初期研修医2年次のときでした。当時は、講義内容を十分に理解する余裕もなく、ただ懸命にマウスを握っていたことを今でもよく覚えています。チューターの先生方には、丁寧かつ温かくご指導いただいただけでなく、休憩時間にも気さくに声をかけていただきました。その姿が印象的で、将来、放射線治療の道に進んだときは、自分もこのような医師でありたいと思うようになりました。

2017年度からは、お世話になった本セミナーに少しでも恩返しができればとの思いから、小委員会の委員として携わるようになり、以来10年間、チューターならびに運営スタッフとして参加してまいりました。2020年度のオンライン開催においては講師を務め、あわせて運営側の中核メンバーとしての役割も担うようになりました。さらに、2022年度からは大阪会場の実行副責任者、2024年度には実行責任者を拝命いたしました。

2024年度は、例年使用していたフクラシア大阪を会場として確保することができず、開催に向けて難しい局面もありましたが、森ノ宮医療大学の奥村先生のご尽力により、何とか会場を整えることができました。当日の運営においても至らぬ点は多々あったかと存じますが、諸先輩方ならびに運営メンバーの皆さまのお支えにより、無事に終えることができました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

この10年を振り返ると、がん放射線治療推進委員会委員の先生方をはじめ、全国各地の多くの放射線腫瘍医の先生方、そして放射線腫瘍医を志す研修医・医学生の皆さんと交流する機会に恵まれたことを、ありがたく感じています。また、かつて参加していた多くの後輩たちが、実際に放射線腫瘍医として歩み始め、活躍している姿に接すると感慨を覚えます。若手が学び、成長し、将来の放射線腫瘍学を担う仲間と出会えるこの場の意義を改めて感じるとともに、ここで受け取ってきたものを次の若手へつなぎ、その歩みを見守っていきたいと思います。



2024年度セミナー集合写真（大阪会場@森ノ宮医療大学）

全国・未来・熱意につながる JASTRO医学生・研修医セミナー

順天堂大学　村本 耀一

JASTRO医学生・研修医セミナー30周年、誠におめでとうございます。このような節目の記念誌に寄稿の機会をいただき、大変感謝しております。

私は医学生・研修医の間に合計3回このセミナーに参加いたしました。歴代唯一の3回参加者と伺い、大変光栄に思うと同時に、自分にとってこのセミナーが進路決定にどれほど大きな意味を持っていたかを改めて思い返しました。1回目のセミナー参加で世界が開け、2回目で確信が深まり、3回目で進路を決めることができました。

もともと私は、がん治療に関心を持って医療の道に進みました。筑波大学の放射線腫瘍科の病院実習で放射線治療に出会い、食道がんが縮小していくのを見て、「放射線治療でがんを根治できるのか」と強い衝撃を受けた経験が、放射線治療への興味の出発点でした。

その後、2015年の医学部5年生時に第27回（統括責任者：若月優先生、実行責任者：吉田匡宏先生）に初めて参加しました。放射線治療の奥深さに触れるだけでなく、全国の先生方と直接お会いしたことで、一気に世界が開ける感覚を味わいました。他大学の先生から推薦図書を教えていただき、施設見学もさせていただくなど、当時の自分はこの機会を活用し尽くしていました。続く2016年、医学部6年生で2回目に参加したときには、「面白い」という気持ちが「将来この分野に進みたい」という確信へと深まっていったように思います。

その後、あえて放射線治療のない一般病院で初期研修を行い、外科、病理、腫瘍内科、緩和ケアを幅広く学びました。しかし、他の領域を学んでもなお、「やはり放射線治療に携わりたい・まだまだ放射線治療を広めたい」という想いは変わりませんでした。専門研修を考える上で研修医2年目に改めて第33回（統括責任者：村上祐司先生、実行責任者：青木秀梨先生）に参加し、合計3回の参加を通じて放射線治療の道に進む決意を固め、順天堂大学へ入局いたしました。

スタッフとしては、2019年の第35回（統括責任者：神宮啓一先生、実行責任者：入江大介先生）から参加させていただきましたが、翌年からはコロナ禍で完全Web開催となり、対面の熱気が伝わりにくい中で、画面越しにどうすれば放射線治療の魅力を届けられるかを試行錯誤したのが印象に残っております。2022年から現地開催が再開し、2023年、2024年は秋田大学 和田先生のもとで副実行責任者を務め、ターコイズブルーのセミナーTシャツを作らせていただきました。2025年、2026年は京都大学 岸先生、琉球大学 山形先生と共に実行責任者を務めさせていただきました。定員24名のところを最大28名まで受け入れた回もあり、自分が実行責任者を務めた回の参加者が、実際に順天堂大学や全国の大学へ入局してくださったことが、何より嬉しいことでした。

振り返ると、このセミナーは私にとって、全国につながる場であり、未来につながる場であり、そして何より「放射線治療をやりたい」という熱意につながる場でした。本セミナーに参加していた医学生時代の自分の熱量を思い出し、身の引き締まる思いです。30周年という節目を迎えた今、これからもこのセミナーが、多くの医学生・研修医にとって人生の進路決定を支える場であり続けてほしいと願っています。昨今は人気が高く、複数回参加は以前より難しくなっておりますが、進路に迷い、考えを深めていく時期の再参加には大きな意義があると感じます。医学生・研修医セミナーに背中を押されて今の自分があることへの感謝を忘れず、これからは自分が次の世代の背中を押せる存在でありたいと思います。

医学生セミナー「後援企業の立場から」

木場 律子
株式会社バリアン メディカル システムズ ガバメント・アフェアーズ部

放射線治療専門医は、この10年で約5割増加（2013年：977名 → 2023年：1,440名）しており、がん放射線治療推進委員会による医学生向けセミナーの長年にわたる継続的な開催がその成果につながっていることに深い敬意を表する。

今後、高齢化の進展に伴うがん患者数の増加により、2040年には放射線治療の需要が約1.24倍に拡大すると見込まれており、これを支えるためには約2,000名の放射線治療医が必要とされている。こうした背景を踏まえ、放射線治療医の育成・確保に向けた取り組みの重要性は一層高まっていると認識している。

バーンアウトの回避や働き方改革が求められる現代においては、医療分野においても若手世代の価値観はワークライフバランスを重視する傾向が強く、タイムパフォーマンスを意識した働き方への関心が高まっている。その中で、勤務計画を立てやすい放射線治療科の特性は、魅力の一つとなり得る。さらに、AIの進展により、先進的医療技術の活用やデータ分析に基づく研究への関心も高まっており、物理学的知見やAIを活用する放射線腫瘍学は、極めて魅力的な領域であると考えられる。

米国においては、放射線治療医はライフスタイルを大きく犠牲にすることなく外科医と同等の臨床的インパクトを発揮できる点が、志望理由の一つとされている。また、給与水準も専門領域の中では中上位に位置し、時間当たりの報酬という観点でも高い評価を受けている。一方、ヨーロッパにおいては国ごとの差はあるものの、米国と比較して給与水準は低く、放射線治療医数も相対的に少ない傾向にある。需要の増加が見込まれる分野であるにもかかわらず人材不足が生じている背景には、各国の医療制度や診療報酬評価の影響が大きい。日本においても、放射線治療医を志す医学生をさらに増やしていくためには、働きやすい環境整備を可能とする診療報酬評価をはじめとした制度的見直しが不可欠であると考えられる。

当社は、JASTROの活動に賛同し、医学生・研修医向けセミナーへの後援を行っており、セミナーで使用する放射線治療計画装置についても、複数企業が持ち回りで貸し出す形で協力している。また、JASTRO賛助会員企業としては、政策的に放射線治療の優先度を高めることを重要課題と位置づけ、JASTROの先生方やシンクタンクとの協働により、提言書の発行や費用対効果に関するエビデンス創出に取り組み、制度設計に資する根拠づくりに取り組んでいる。産業界の活動としては、日本画像医療システム工業会の経済部会放射線治療委員会に参画し、医学会と産業界との連携強化に努めている。また、業界団体の活動としては、一般の方が放射線治療の有用性に関する理解を深めることも重要であるとの認識のもと、一般社団法人 がん医療の今を共有する会：Alliance for cancer treatment（ACT）に参画し、Shared Decision Making（SDM）の普及活動を推進している。一企業としてできることには限りがあるが、団体として連携して取り組むことで、そのインパクトを高めることができると考えている。

今後も、放射線治療を志す医師のさらなる増加と、より多くのがん患者に質の高い放射線治療が提供される社会の実現に向けて、引き続きJASTROと連携し、実効性のある取り組みを推進していく所存である。

教育の場に立ち会って感じた放射線治療の魅力と可能性

佐藤　礼
エレクタ株式会社 リニアック＆ソフトウェアソリューションズ部

医学生・研修医のための放射線治療セミナーが30周年を迎えられたことに、賛助企業であるエレクタ株式会社を代表し、心よりお祝い申し上げます。本セミナーが長年にわたり継続され、次世代を担う医師の育成に大きく貢献してこられたことに、深い敬意を表します。

エレクタは、放射線治療に関わる医療機器メーカーとして、これまでも教育・人材育成の重要性を強く認識し、本セミナーを支援してきました。装置や技術は年々進歩しますが、それを適切に使いこなし、患者さんにとって最善の医療を提供するためには、若い段階から放射線治療の考え方や臨床的判断に触れる機会が不可欠です。本セミナーは、その役割を30年にわたり一貫して果たしてきた、非常に貴重な教育の場であると考えています。

私は2018年より、エレクタ株式会社のアプリケーショントレーニングチームの一員として本セミナーに参加し、またマーケティングの立場からも複数回サポートに関わらせていただきました。現場で印象的だったのは、医学生・研修医の皆さんが、治療計画実習やディスカッションを通じて、放射線治療を単なる理論ではなく「臨床の現実」として理解しようと真剣に取り組んでいた姿です。企業の立場で参加している私にとっても、その姿勢は学ぶ点の多いものでした。

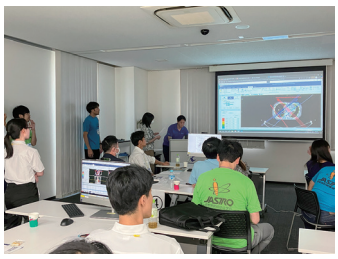
アプリケーショントレーニングとしての役割は、システム操作や技術的な支援にとどまりません。放射線治療における判断の背景や考え方が、参加者自身の言葉で整理されていく過程を間近で見られることは、本セミナーならではの価値だと感じています。完成した計画の出来栄え以上に、思考の過程を重視する教育方針は、医師としての基盤を育てる上で重要な要素だと考えます。

また、マーケティングという立場で本セミナーを支援する中で、賛助企業としての関与の在り方についても、あらためて考える機会を得ました。本セミナーにおいて企業に求められているのは、特定の製品を訴求することではなく、教育の場を支え、正確で中立的な情報提供を通じて、安全で質の高い放射線治療を次世代につなげていくことだと考えています。

これは、エレクタが掲げる理念である「Hope for everyone dealing with cancer」―がんと向き合うすべての人に希望を届ける― という想いとも深く重なるものです。

学会、教育機関、そして企業がそれぞれの立場を尊重しながら協力する本セミナーの形は、その好例と言えるでしょう。

放射線治療は、一見すると難しさを感じやすい分野ではありますが、本セミナーを通じて、その奥深さや臨床的意義に触れ、「将来の選択肢の一つとして考えてみたい」と感じる若い医師が育ってきたことこそが、30年の歴史が積み重ねてきた成果だと感じています。エレクタは、今後も賛助企業として、本セミナーの趣旨に共感し、放射線治療の未来を担う人材育成を支援し続けてまいります。

各班が作成した治療計画とその解説を真剣に聞き入る参加者の方々

後援企業の立場から

中島 尚紀
株式会社日立ハイテク ヘルスケア事業統括本部 治療システム事業部 営業本部 治療マーケティング部

JASTRO医学生・研修医のための放射線治療セミナーが、30周年という大きな節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。1995年の開講以来、本セミナーは放射線治療分野に関心を持つ医学生・研修医の皆さまに向け、学びと交流の機会を継続的に提供されてきました。その歩みは、我が国の放射線治療の発展を支える人材育成に多大な貢献を果たしてこられたものと、深い敬意を表します。

株式会社日立ハイテクは、2018年開催のセミナーより後援企業として参画させていただき、本セミナーに携わってまいりました（2023年までは株式会社日立製作所として後援）。放射線治療計画ソフトウェア「RayStation」を含む製品・ソリューション領域に携わる企業として、本セミナーが取り組まれてきた人材育成の意義に深く共感しております。

本セミナーの特長は、放射線治療の基礎から応用、さらには実臨床に即した考え方に至るまで、体系的に学べる構成にあると同時に、第一線で活躍する医師との活発な意見交換が行われている点にあると感じております。私ども後援企業にとっても、参加される医学生・研修医の皆さまの真摯な姿勢や率直なお声に触れることは、放射線治療の未来を考える上で多くの気づきを得る貴重な機会となってまいりました。

近年、放射線治療を取り巻く環境は目覚ましい技術進歩とともに大きく変化しています。治療計画や情報活用の高度化が進む一方で、患者さん一人ひとりに最適な治療を提供するための総合的な判断力や、多職種と連携しながら医療を実践していく力の重要性は、これまで以上に高まっています。そのような時代背景の中で、本セミナーが一貫して「人を育てる」ことに重きを置き続けてきた意義は、極めて大きいものと考えております。

今後もJASTRO医学生・研修医のための放射線治療セミナーが、放射線治療の魅力と社会的意義を次世代へと伝え続け、さらなる発展を遂げられることを心より祈念しております。株式会社日立ハイテクも、後援企業の一員として、本セミナーの取り組みと放射線治療分野の発展に、引き続き微力ながら貢献してまいる所存です。

30周年、誠におめでとうございます。





あとがき

将来に向けて

和田 優貴
医学生・研修医のための放射線治療セミナー小委員会委員長／秋田大学 医学部附属病院

1995年より毎年開催されてきた「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」は、30周年という大きな節目を迎えました。これまで本セミナーを支えてこられた先生方、チューターの皆様、そして情熱をもって参加してくださった医学生・研修医の皆様に、心より敬意と感謝を申し上げます。

本セミナーは、放射線治療の魅力を若い世代に直接伝える場として始まり、講義や実習にとどまらず、人と人とのつながりの中で放射線腫瘍学の志を育む場として発展してきました。セミナーで出会い、放射線治療医を志し、やがて指導する立場として再び関わる――その循環は、単なる教育の枠を超え、放射線治療の未来を支える貴重な基盤となっています。

放射線治療医の数は増加してきているものの、2040年問題を見据えた高齢者やがん患者のさらなる増加、放射線治療の高精度化や適応拡大に伴い、放射線治療医の需要は今後も確実に拡大します。すなわち、放射線治療医の人材育成は、すでに達成されつつある課題ではなく、これからさらにその重要性が高まり続ける継続的な課題です。同時に、社会環境や指導方法などが時代によって変化してきていることに伴い、本セミナーの運営や求められる在り方も変わりつつあることを実感しています。

こうした時代の変化を踏まえ、本セミナーをより良い形へと発展させていくために、セミナー内容の充実（他領域や類似セミナーにはないJASTROとしてのセミナーの魅力の確立）、若手放射線治療医の主体的な運営参画（若手が後輩へと想いと情熱をつなぐ）、セミナー参加者とチューターとが継続的につながりを持てるようなシステムの構築（チャットアプリなどを利用した継続的な情報提供）など、いくつかの新たな取り組みを進めています。これらは単なる運営上の工夫ではなく、歴史ある本セミナーの価値をさらに高め、これからの新たな30年間を、次世代へと確実につなげていくための挑戦です。

放射線治療は低侵襲で高精度な治療として進化を続けており、今後のがん医療においてその役割は一層重要となります。そのためにも、現役の放射線治療医が自らの言葉でその魅力や情熱を、医学生や研修医に直接伝える機会の重要性も、ますます高まると確信しています。本セミナーは、そのような「人から人へと志をつなぐ場」として、これからも進化し続けます。

30周年は到達点ではなく、新たな出発点です。これまで紡がれてきた熱意とつながりを次の世代へと受け継ぎながら、本セミナーをさらに発展させ、未来へとつなげていきます。今後とも「医学生・研修医のための放射線治療セミナー」にご理解とご支援を賜れますと幸甚です。





30周年の節目である2025年度セミナーの参加者、チューターと

日本放射線腫瘍学会
医学生・研修医のための放射線治療セミナー 30 周年記念誌

2026（令和 8）年 8 月 31 日　発行

編　集　中村 聡明　がん放射線治療推進委員会委員長
和田 優貴　医学生・研修医セミナー小委員会委員長
板澤 朋子　医学生・研修医セミナー 30 周年記念誌 編集グループ 委員長
染谷 正則　医学生・研修医セミナー 30 周年記念誌 編集グループ 委員
今葷倍 敏行　医学生・研修医セミナー 30 周年記念誌 編集グループ 委員
戸田 一真　医学生・研修医セミナー 30 周年記念誌 編集グループ 委員
相部 則博　医学生・研修医セミナー 30 周年記念誌 編集グループ 委員

発　行　公益社団法人 日本放射線腫瘍学会
〒104-0031 東京都中央区京橋 1 丁目 4-14 TOKI ビル 5 階

印刷・製本　株式会社 白峰社


JASTRO